金沢市近岡遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

(7)

1984

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、運輸省第一港湾建設局の委託により、昭和58年7月11日より同59年3月30日にかけて実施した金沢港泊地造成事業にかかる金沢市近岡遺跡発掘調査の概要報告書である。なお、調査費用は同建設局が負担した。

2　調査および出土品の検討にあたっては、次の各位の指導・助言を得た。

狩野　久、桜井甚一、荒木繁行、浅香年木、田川捷一、伊林永幸、土肥　孝、滋井　真、宮本哲郎、出越茂和、楠　正勝　埋蔵文化財センター職員

3　調査担当者

三浦純夫、芝田　悟、戸澗幹夫

4　調査補助

栃木英道、山津康義、石浦めぐみ

5　本書に掲載した出土品の整理にあたっては、次の方々の協力を得た。

荒木繁行、勝島栄蔵、河村裕子、土井真知子、田植孝子、小林直子、北田琴美、河村真紀、小屋玲子、正木直子（以上埋蔵文化財協会）　栃木英道、山津康義、中島雄二

6　本書の執筆は、出土土器については（III—2）栃木英道が担当し、その他の執筆・編集は戸澗があたった。

7　木簡および人形の写真は、福島正実主事の協力を得て赤外線テレビカメラより撮影したものを掲載した。

8　挿図中の方位は磁北を示しており、レベルの数値は絶対高である。

9　本文中の（註）は、すべて巻末に掲げた。

10　発掘調査では、次の方々の協力を得た。

宮田ハル、北野スイ、西川愛子、坂田あや子、中栄みゆき、村田清子、坂井かず子、宮沢妥、高村正雄、高村松子、高村緑、高崎道子、北村芳子、高崎春子、竹山くに子、高柳美代子、最里健太郎、田中たまき、井高ひろ美

金沢市近岡遺跡

目　次

例　言

I　位置と環境……2

II　調査の経緯と経過……4

III　主な遺構と遺物……6

　1　大　溝……6

　2　大溝出土土器……10

　3　大溝出土木製品……22

　4　平安時代の出土品……29

　5　3号溝……30

IV　今後の課題—まとめにかえて—……31

参　考

註

I　位置と環境

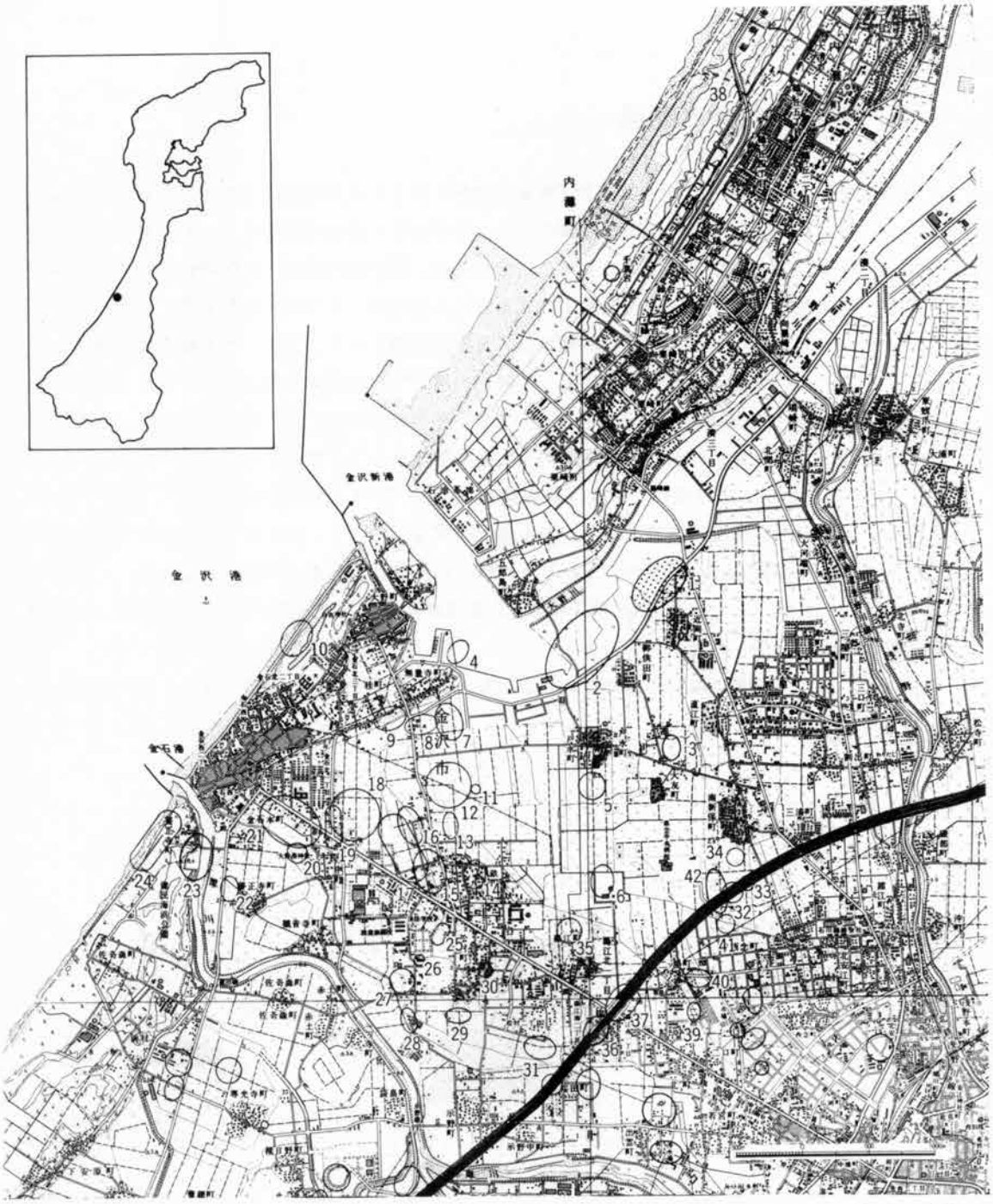
金沢市近岡遺跡は、金沢平野北西部にあたる大野川左岸の後背湿地に立地する。この地域の平野は、大野川、浅野川、犀川などの沖積作用によって形成されたもので、広くは手取扇状地の北部扇端地域にも接する。本遺跡周辺は、自然湧水地帯であることからグライ土壌が被覆する地域であり、かつては水田が広がっていた。『皇国地誌』石川郡近岡村の項には

地勢　大概平坦ニシテ盡ク田圃トナル。北方沼田多ク地稍低シ。舟ニ乗シテ植苗ヲナス。
　　西北河北湖ノ尾流ヲ帯ヒ。運輸便ナリ。人家中央ニ位ス。

と明治期の状況を伝えている。しかし現在では、金沢港泊地造成とともに臨海工業化が進み、旧景観が大きく失われている。本遺跡の立地する現標高は1.5m前後を測るが、もとは1m前後の低湿地であった。

本遺跡の所在する金沢平野北西部は、県内でも有数の遺跡密集地域である。縄文時代の遺跡には、無量寺金沢港遺跡、畝田遺跡、松村A・B遺跡などの後期から晩期にかけての遺跡が知られている。弥生時代の遺跡では、遠賀川系土器や柴山出村式併行期の資料を得た戸水C遺跡が隣接しているのをはじめとして、南西部の標高約2～4mの微高地に数多く分布している。なかでも、寺中遺跡、畝田B遺跡、戸水B遺跡などは、県内弥生式土器の基礎資料を提供した標式遺跡である。また、本遺跡の南東約2.5kmには、弥生後期に属する木製大型高坏や石剣などの貴重な資料が出土した西念・南新保遺跡[1]がある。弥生時代終末期から古墳時代にかけて盛期を迎える遺跡については急激な増加現象がみられる。本遺跡の西約1kmには、無量寺遺跡、同B遺跡、桂遺跡などがあり、無量寺B遺跡からは[2]、五銖銭を描いた双頭竜鳳文鏡(舶載鏡)が出土している。また、南約2kmには、南新保C遺跡、同D遺跡、二口六丁遺跡などがある。南新保D遺跡では[3]、円形周溝状遺構や大溝が検出され、多量の月影式土器が出土している。二口六丁遺跡では[4]、月影式土器から古府クルビ式土器にいたる過渡的様相をもつ土器が出土するとともに、鋤・鍬などの農耕具をはじめとする多数の木製品が出土している。

奈良・平安時代の遺跡については、本遺跡の南約200mに戸水C遺跡が接している。戸水C遺跡では、7間×2間をはじめとする大型掘立柱建物跡や井戸が多数検出されており、「依」「東」と読める墨書土器や緑釉・灰釉陶器多数、石鍔、鏡、和同開珎、斎串などの一般集落跡と質的に異なった出土品が目立つことからも、遺跡の性格付けをめぐって論議が続けられている。また、戸水C遺跡に近接する大友遺跡でも、掘立柱建物跡とともに「依」の墨書土器が出土しており両遺跡の関連を窺わせている。南約2kmには、藤江A遺跡、同B遺跡があり、特に藤江B遺跡では[5]、「石田」「石田庄」と読める墨書土器が出土しており、初期庄園の位置を知るうえでの有効な資料を提供した。また、南西約1kmにある畝田無量寺遺跡[6]でも「庄」と読める墨書土器や大型掘立柱建物跡が検出されている。これらの律令期の遺跡は、古代大野郷とその周辺の集落分布を知るうえで重要である。一方、中世に至ると本遺跡一帯は、富積保に含まれることになるが、西約3kmには著名な普正寺遺跡がある。



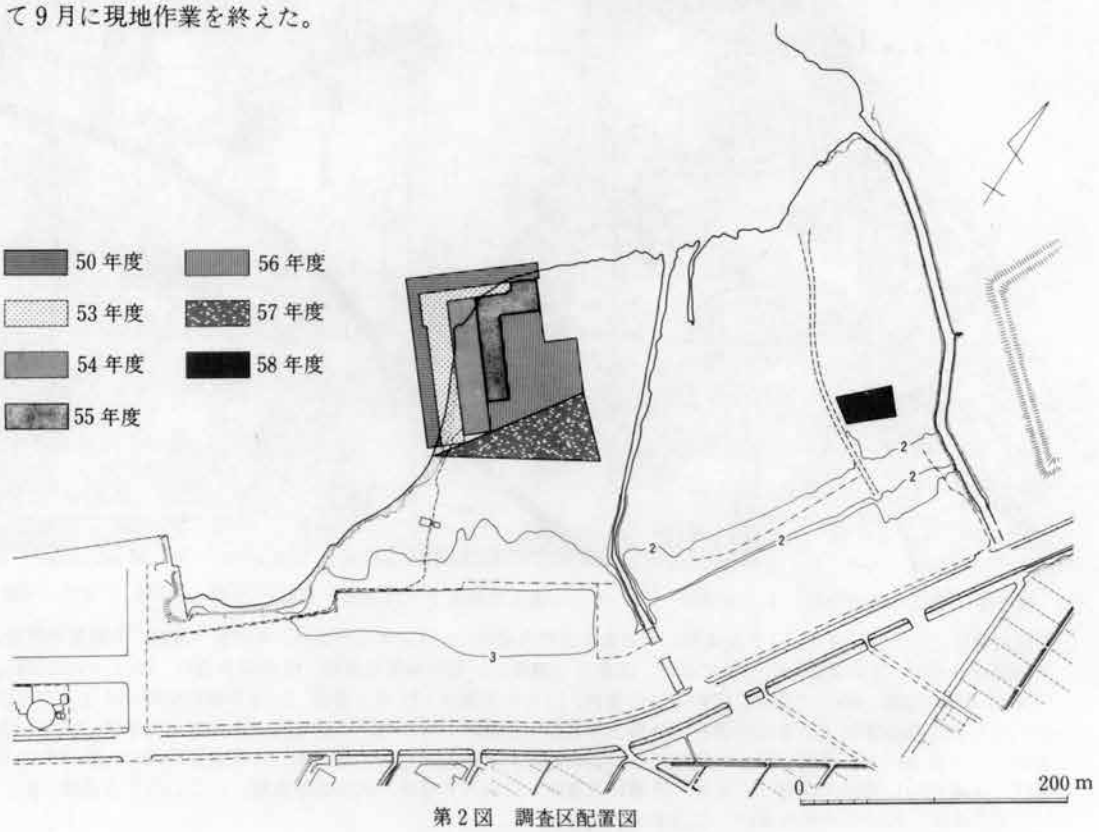
第1図　周辺の遺跡分布　1：50,000　　（国土地理院1：25,000「金石」「粟崎」「松任」「金沢」分載）

1 **近岡遺跡**、2 戸水C遺跡、3 大友遺跡、4 無量寺金沢港遺跡、5 戸水オモテ遺跡、6 戸水B遺跡、7 無量寺遺跡、8 無量寺B遺跡、9 桂遺跡、10 金石北遺跡、11 畝田C遺跡、12 畝田無量寺遺跡、13 畝田B遺跡、14 畝田御台場跡、15 畝田大徳川遺跡、16 畝田遺跡、17 畝田寺中遺跡、18 寺中B遺跡、19 寺中遺跡、20 寺中御台場跡、21 金石本田遺跡、22 普正寺高畠遺跡、23 普正寺遺跡、24 普正寺番屋砂丘遺跡、25 松村西の城遺跡、26 松村平田遺跡、27 松村A遺跡、28 松村どのまえ遺跡、29 松村B遺跡、30 松村寺の前遺跡、31 松村高見遺跡、32 南新保B遺跡、33 南新保D遺跡、34 南新保C遺跡、35 藤江C遺跡、36 藤江A遺跡、37 藤江B遺跡、38 向粟崎遺跡、39 二口六丁A遺跡、40 二口六丁B遺跡、41 西念南新保遺跡、42 南新保A遺跡

II　調査の経緯と経過

近岡遺跡は、昭和45年に戸水C遺跡、無量寺遺跡とともに金沢港造成工事中に発見された遺跡である。対応にあたった関係機関の協議のもと、同年6月工事を一時中止し、石川考古学研究会によって発掘調査を実施することとなった。その結果、縄文時代晩期・古墳時代前期の文化層が存在し、縄文晩期では、中屋式土器と下野式土器のほか凹石・すり石・磨製石斧・垂飾・石鏃・スクレイパー等が出土し、古墳時代前期では、月影式土器とともに管玉・木製鍬などが出土している。また、この調査では藤則雄氏によって晩期の層より花粉遺体が検出され、花粉学的研究から「縄文晩期農耕」を問題提起することとなった(7)。その後の調査では、昭和56年12月に道路改良にともなう発掘調査が行われ、月影期の土坑墓や甕棺墓などが検出されている(8)。

ところで、金沢港泊地造成にともなう発掘調査は、昭和50年より計画的に実施しており、同57年度をもって戸水C遺跡の事業区域にかかる部分の調査を終えた。同年9月近岡地内を分布調査し、事業区域内北東端に近岡遺跡の広がりと理解される遺物包含層の存在を確認した。七尾港工事々務所との協議にもとづき同58年7月より近岡遺跡の発掘調査を開始した。発掘調査では、地質が軟弱なことや激しい湧水地帯であることから、掘り上った遺構も翌日には崩落するといった悪条件下にあり、作業は難渋を極めた。しかしながら、貴重な木製品が出土するなどの成果を得て9月に現地作業を終えた。



第2図　調査区配置図

発掘調査日誌抄

7月11日（月）

調査区を設定し、表土・盛土の排土作業を開始するとともに、基本層序の確認を行う。

7月12日（火）

表土・盛土の排土作業継続。作業小屋の設営と発掘機材の搬入を行う。

7月20日（水）～7月27日（水）

長雨と湧水により作業地盤が軟弱で表土除去が困難な状態となり、連日排水作業が続く。

7月28日（木）

表土・盛土の排土作業を再開。

8月2日（火）

第3層・第4層の掘り下げを開始し、標高移動、調査区内の杭打ち作業を行う。

8月5日（金）

遺構検出作業を開始し、近代遺構より掘り下げる。調査区の層序の実測作業も行う。

8月12日（水）

調査区北端に大溝が検出され、掘り下げ作業に入る。

8月26日（金）

大溝掘り下げを継続。覆土下層より庖丁形木製品をはじめ多数の木製品が出土する。調査区南端より遺構の実測作業に入る。

8月31日（水）

大溝北側地点より木簡・人形・「依」と読める墨書土器が近接して出土する。

9月17日（土）

大溝掘り下げ作業継続。狩野久飛鳥藤原宮跡発掘調査部長に出土木簡を実見して頂く。

9月22日（木）

大溝掘り下げ作業および実測作業を終える。

9月26日（月）

調査全区を清掃し、全体写真の撮影を行う。

9月28日（水）

機材撤収し現地作業を終える。

耕土除去作業

遺構検出作業

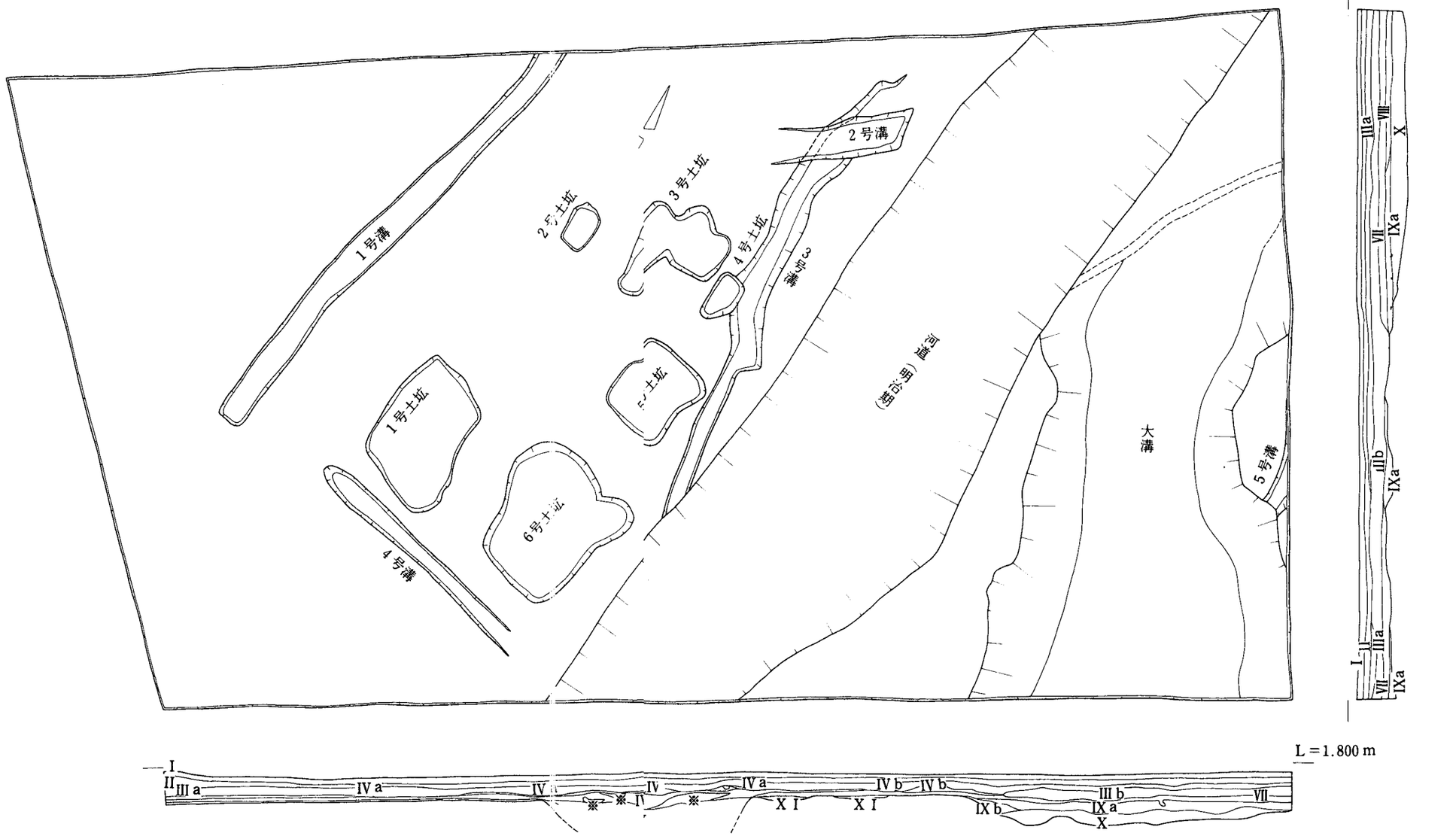
III　主な遺構と遺物

今回の調査対象となった地点は、港湾造成工事にともなって盛土・整地されており、かつては標高1m前後を測る湿田地帯であり、大野川左岸に向かって北西ないし南西方向に緩やかに傾斜する地点にあったといえる。それは、調査区の東壁ライン約40mの土層から看取でき（第3図）、北東部に認められた黒色を呈する遺物包含層は、明治期の川ないし用水跡（明治13年の一銭銅貨等出土）に断ち切られるものの、それから南西部では全く認められなくなり、本来は地形の傾斜にともなって遺物包含層が漸移的に解消されていったと考えられるからである。また、その南西部では、北東部に存在しなかった灰色粘質土の還元土が介在しており、遺物包含層の解消を境にして低地が広がっていたことを示している。遺構においても、北東側では月影期を中心とする大溝が検出されたものの、還元層に被われた北西側には、近代の溝状遺構3条と同期の用途不明の大型方形土坑6基が存在するのみであり、こうした遺構配置も先の微地形に対応するものと考えられる。と同時に、本遺跡の中心部が北東方向の微高地に立地し、今回の調査地点は、中心部からみて南西端にあたるものと考えられる。

1　大溝（第3・4図）

調査面積の制約や、大溝の一部が先述したように近代の川ないし用水跡によって切られていることもあり、正確な規模は明言できないが、概ね上端の最小幅約10m、検出面からの最深約1mを測るものである。北東から北方向に蛇行する流路を示している。先述した地形傾斜を利用して構築し、還元層に被われた低地との境界を示しているかのような流路は、微高地にある聚落を外郭するかのようである。溝中の堆積土は、上層に黒色粘質土、中層に灰色弱粘質土、下層に灰色砂層からなっており、緩やかに傾斜する肩部付近には明灰色粘質土の流れ込みが認められる。これらの層は、幅が広く鈍いU字状を呈する溝底面に対応するように、溝中央部に向かって微妙に傾斜しているが、概ね水平堆積に近いものである。水平堆積という状況だけをとってみれば、この大溝が自然流入によるものと考えられなくもないが、肩部の立ち上がりと同部の溝底に向かう層序の傾斜は明確であり、人為的に掘削されたものと考えられる。溝底面は、湧水砂層（いわゆるめくら砂）であり、使用時には水流があったものと考えられる。それ故に、中・下層は使用時の水流によって水平堆積したのであり、上層は廃棄後に中・下層に準じて堆積・固化したものであろう。出土遺物は各層から出土するが、特に中・下層に著しい。中・下層では、多量の月影式土器とともに鍬・鋤をはじめとする木製品が出土しており、下層には鉄器の出土もあった。土器では、月影式土器とともに古府クルビ式土器の出土もみられた。したがって、この大溝の使用年代はほぼ月影期を中心とすることができ、古府クルビ期には機能を失っていたであろう。

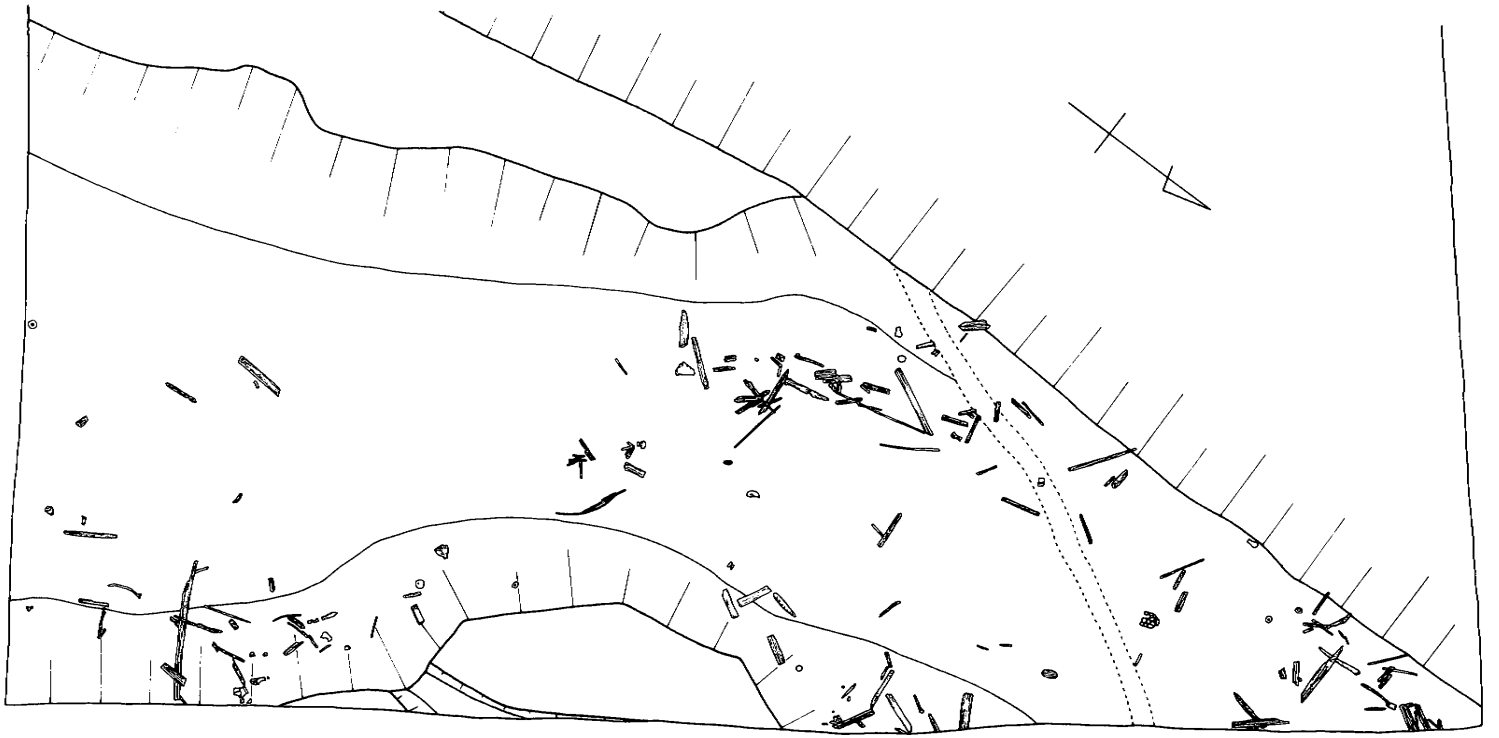
ところで、大溝の北端で平安時代の溝状遺構との重複が考えられた。北壁セクション北部で大溝覆土中層が黒色粘質土に変化しており、また北端部の出土品には月影式土器とともに人形・墨



I　表土（盛土）
II　濁黄色土（盛土）
III a　灰色粘質土層
III b　灰色粘質土層（VII層の土がブロック状に混入。IV層中の黒色土粒子を少量含む。）
IV a　灰色粘質土層（黒色土粒子を多量に含む）
IV b　灰色粘質土層（黒色土粒子を少量含む）
V　青灰色砂層
VI　黒褐色粘質土層
※青灰色粘質土地山ブロック

VII　黒色粘質土層
VIII　黒色粘質土層（VII層よりもさらに黒みをおびている）
IXa　灰色弱粘質土層
IXb　明灰色弱粘質土層
X　灰色砂層（灰色粗砂層にIX層の土がブロック状に混入している地点や、灰色粗砂層だけの地点がある）
XI　淡灰褐色粘質土層

第1　遺構全体図



第4図　大溝木製品出土状況

Ⅰ 表土
Ⅱ 濁黄色土
Ⅲa 灰色粘質土層
Ⅲb 灰色粘質土層（Ⅶ層の土がブロック状に混入）
Ⅶ 黒色粘質土層
Ⅷ 黒色粘質土層（Ⅶ層よりもさらに黒みをおびている）
Ⅸa 灰色弱粘質土層
Ⅹ 灰色砂層（灰色粗砂層にⅨa層の土がブロック状に混入している地点や灰色粗砂層だけの地点がある）

書土器(完形)・木簡が近接して出土しており、平安時代に新たな溝状遺構の構築があった可能性を深めた。法量は明確にできなかったが、流路は遺物の出土状況から南北にあると考えられ、南側は、明治期の川ないし用水跡に切られた為に検出されなかった。

2　大溝出土土器

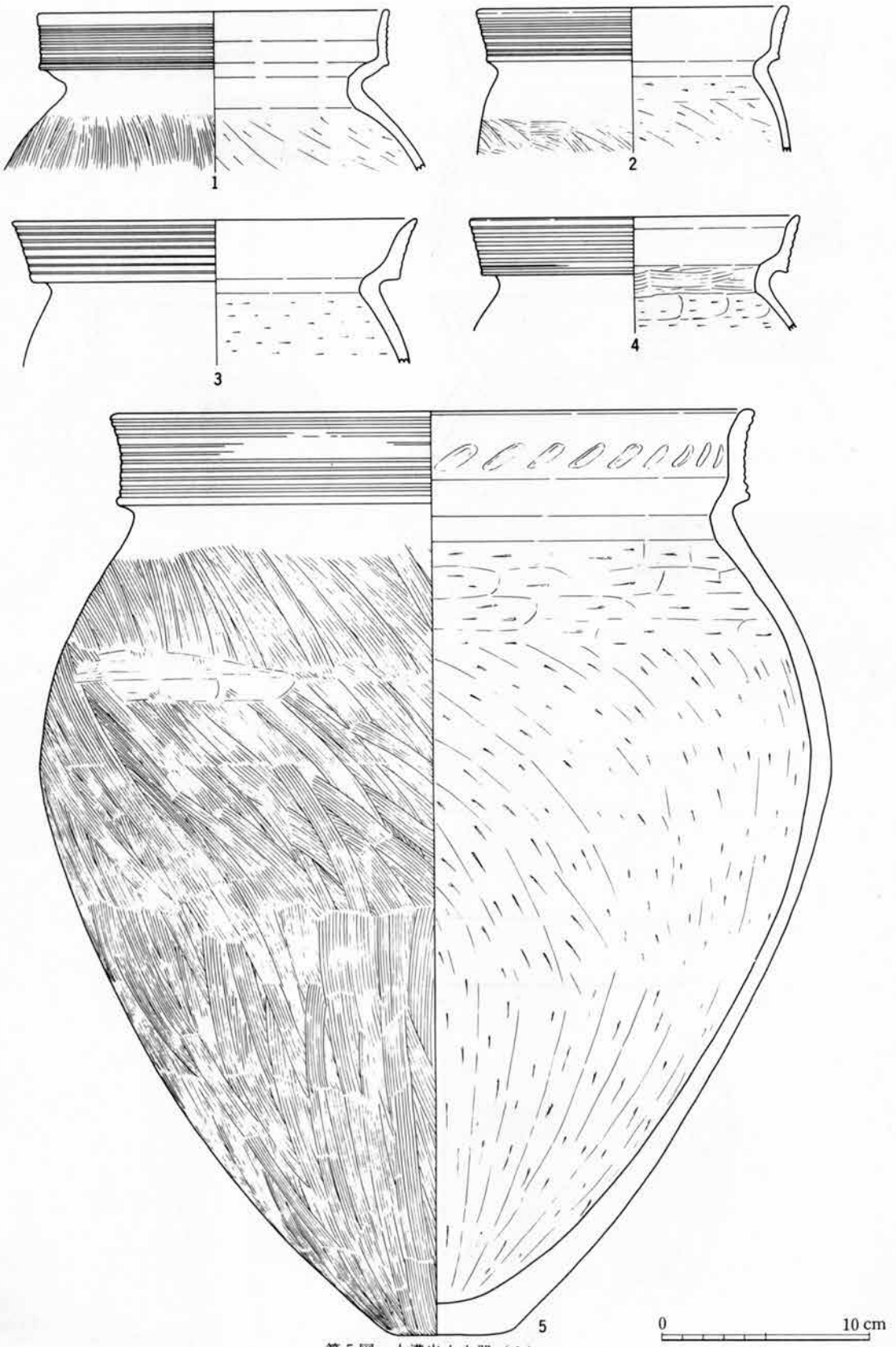
本調査において、大溝から出土した土器は遺物整理箱にしておよそ30ケースになる。大溝の覆土は三層にわけられるが、土器はそのうち中層と下層から多く出土した。上層から出土したものは量的には少なく、総じてその遺存状態はあまりよくない。時期的には月影期に比定されるものが多いほか、月影期より古い時期のものも出土している。また一部については、月影式土器の範疇から逸脱しより新しい型式(古墳時代前期の範囲で)のものがある。これらは全体的にみれば一応層序にしたがっているといえるが、個別的にみると例外も少なくない。

以下現在までに実測し得た土器(土製品を含む)のうち、大溝出土の土器として一般的と考えられるもの及び特殊または貴重な資料50点について、実測図を掲載し若干の説明をしていきたい。なお個々の土器の法量その他観察事項については、表Ⅰを参照していただきたい。

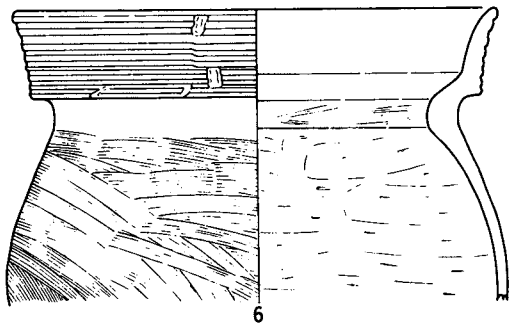
甕形土器(第5図～第7図・1～19)

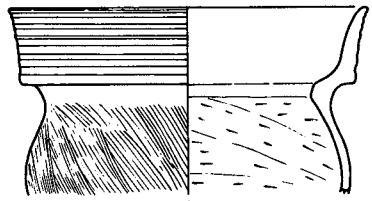
1～9は有段口縁部の外面に擬凹線をめぐらせた甕である。このうち1と2は口縁部がほぼ直立し、端部も比較的厚く丸みをもつもので、月影期よりやや古い時期の所産と考えられるが、他の3～9は月影期の所産としてよいであろう。大溝全体としては、口縁部が外傾し端部が先細りにしあげられた3・4・6・9などが多い。口縁部が外反し端部が外側へまげられ、外面屈曲部の稜もやや不明瞭で、内面には連続する指頭圧痕が認められる7と8は、上層からの出土である。5は口径30.6cm、器高45cmを測る大型品である。外反ぎみの口縁部は比較的厚いが端部はやや外傾する。口縁部の内面には連続する指頭圧痕がみられる。この種の大型の甕の完形品は少なく貴重な資料といえよう。1～9の類例としては、1と2に金沢市塚崎遺跡[9]第5号竪穴(塚崎Ⅱ期)、3・4・6・9に同第6号竪穴(塚崎Ⅲ期)、5・7・8に金沢市南新保D遺跡出土土器[3]などをあげることができる。

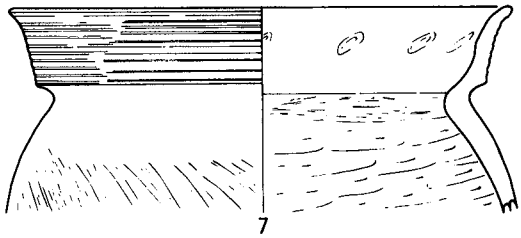
10～13は1～9と同様有段口縁をもつが、その外面には擬凹線などをめぐらさず、口縁部をナデ調整によってしあげたものである。このうち10の器面は細かな素地を泥状におおい(いわゆる化粧がけが施され)黄褐色を呈する。外面に煤の付着は全くみられず、胴下半にはヘラ磨き調整の痕跡が認められる。11は比較的広い口縁部が大きく外反するものである。また12は11と同じく口縁部は外反するが、内面における屈曲の度合いが強く、端部には連続する指頭圧痕がみられる。10～12は南新保D遺跡などに類例を求め得よう。これに対して13は上層からの出土で、口縁部にナデ調整によってつくりだされた面や稜を有し、口縁端部内面もわずかに肥厚している。また外面の肩部は横方向のハケ調整でしあげている。類例として金沢市押野西遺跡(第Ⅱ次)L－4土坑[10]、同二口六丁遺跡(第Ⅰ次)[4]、同高畠遺跡[11]出土土器などがあげられる。それらは口縁端部内面が肥厚する畿内布留式併行期の代表的な「く」の字形口縁の甕を伴っている。したがっ

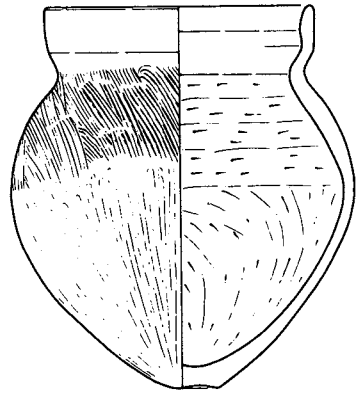


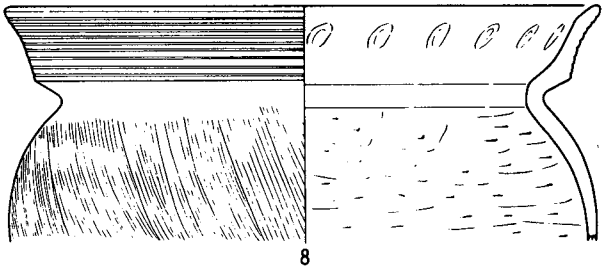
第5図　大溝出土土器（1）

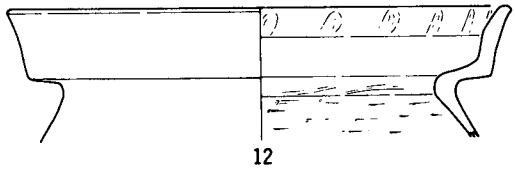

6

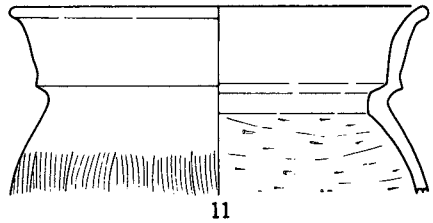

9

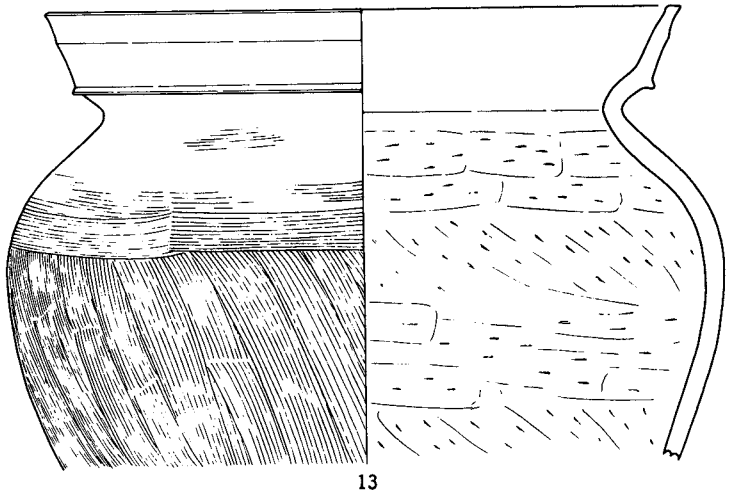

7


10


8

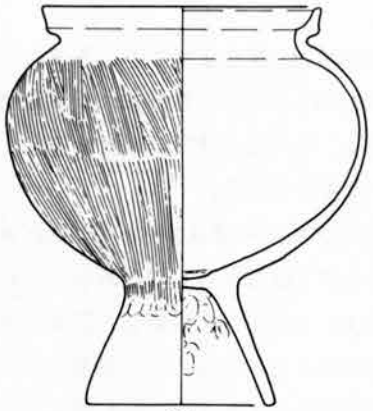

12

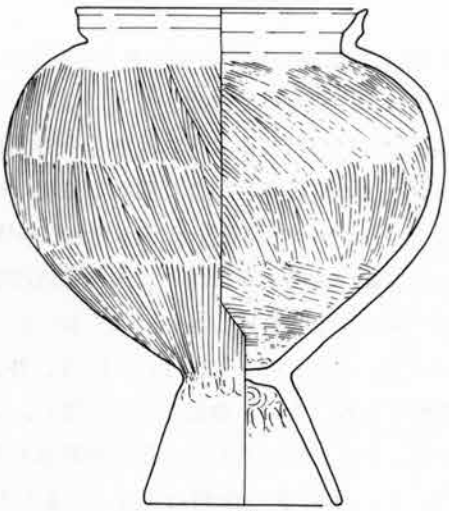

11

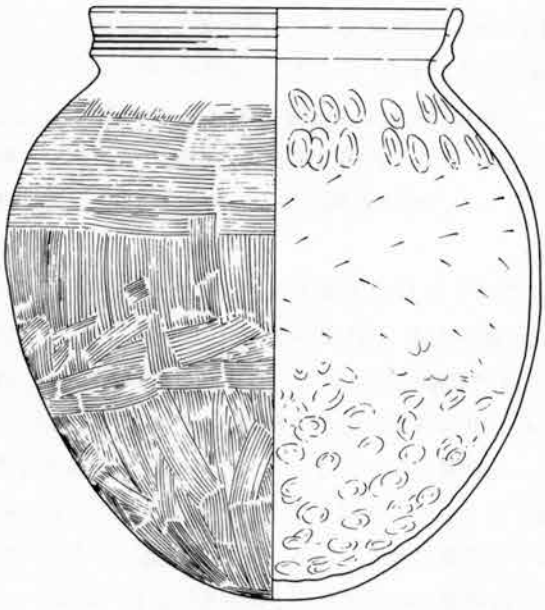

13

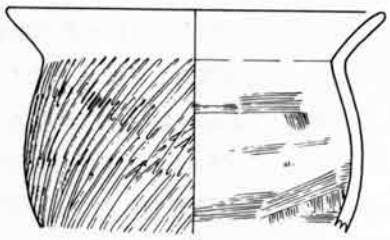
第6図　大溝出土土器（2）

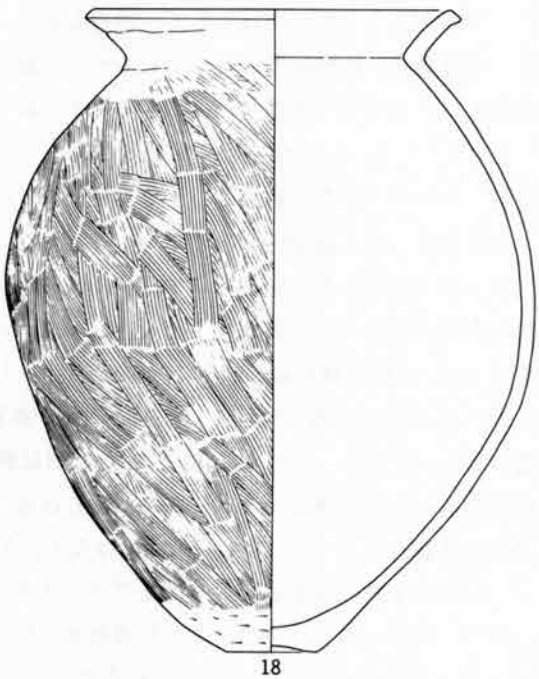
0　10 cm

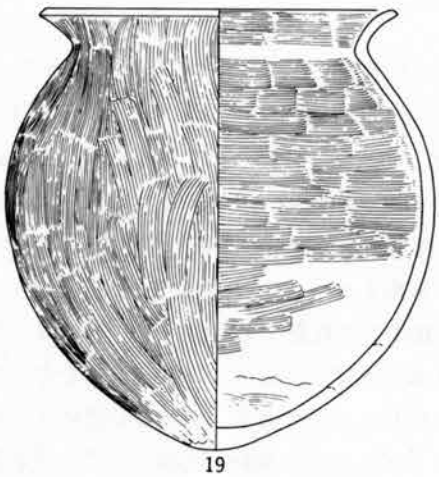












第7図　大溝出土土器（3）

0　10 cm

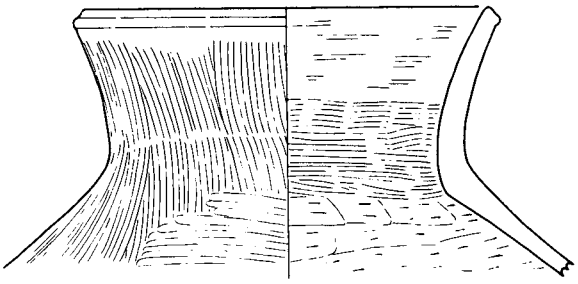
て13も布留式併行期の所産と考えられるが、大溝においては、現在までのところその代表的な甕の出土は小片を除いて確認されていない。いずれにせよ、13をはじめ月影式土器の範疇を逸脱し布留式併行期の型式と考えられる若干の土器については、その出土状況の検討や類例との比較を含め、今後の整理過程でより明確な位置づけをしたいと考えている。

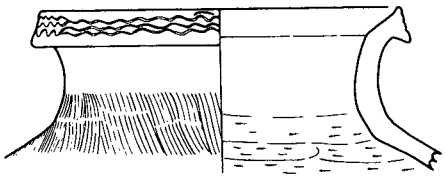
14と15はS字状口縁を有する脚台付の甕である。このタイプの甕は、東海地方や滋賀県などにおいて、畿内庄内式新段階から布留式古段階併行期にかけて盛行するものである。それは一般に器面を黒っぽくしあげ、外面は深く鋭いかき目で内面はナデによって調整し、器壁は薄いとされている(12)。これにたいして14と15は、外面は黄褐色を呈し目の細かいハケ調整(15は内面もハケ調整)をおこない、器壁も比較的厚い。口縁端部ののびもあまりなく、脚台端部も面などはもたず丸くおさめられており、胎土や焼成もそれほど良好とはいえないため、搬入品とは考えにくい(13)。この種の甕の類例は少なく、また大溝から他にも数点出土をみていることもあり、今後さらに検討を要するといえよう。16は有段口縁(内面では「く」の字形に近い)を有する丸底の甕で、肩部は外面に横方向のハケ調整がみられ、内面にはそれに対応する指頭圧痕が認められる。また胴下半から底部にかけても多数の指頭圧痕がみられる。外面は煤の付着が著しく、内面(特に底部)には炭化物が残存している。これらのことから、16は類例は少ないものの13と同じく月影式土器の範疇には入らないものと考えられる。

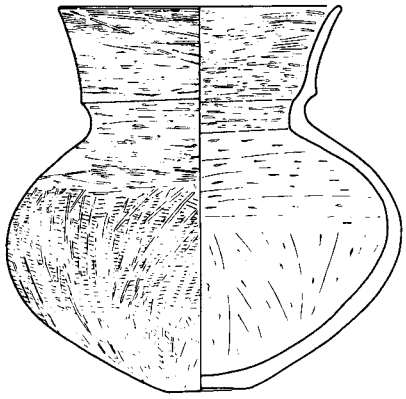
17～19は「く」の字形口縁を有する甕である。このうち17は外面をタタキによってしあげているもので、同種の(口縁形態の異なるものを含む)甕は大溝で他に数点出土している。18と19は口縁端部を面取りしたものである。外面はハケ(18の底部付近にはヘラ削り痕が認められる)、内面は18がナデ、19がハケ調整をおこなっている。19は底部付近が比較的ふくらみ底径も小さいことなどから、月影式土器として大過あるまい。北加賀においては、「く」の字形口縁を有する甕は、口縁端部が比較的厚く丸みをもつもの、面をもつもの、先細りするものなどがあり、内面の調整もハケ、ナデ、ヘラ削りによるものなどがあり多様性に富んでいる。完形品にあまり恵まれていないこともあって、現在その系譜関係については明確とはいえないと思われる。17～19についても、今後そうした方向性のなかでの位置づけが必要といえよう。

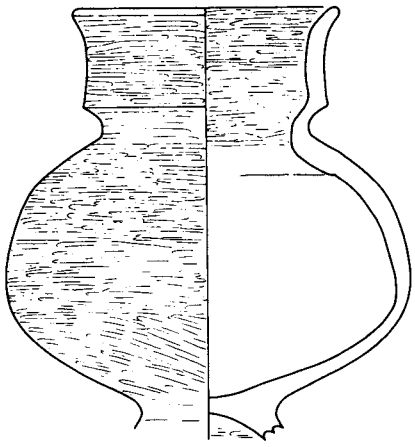
壺形土器(第8図20～25)

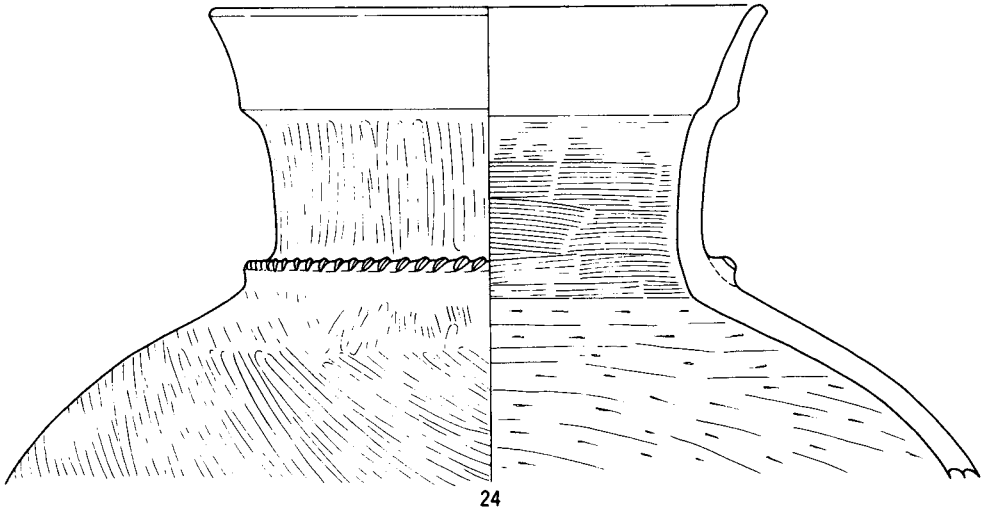
20～25は壺形土器である。このうち20は口頸部がわずかに外反するやや頸長のもので、21は狭い有段口縁部外面に波状文を施したものである。ともに月影式土器に先行するものと思われる。22と23は有段口縁を有し、22は平底(径は3.1cm、中央がやや凹む)で外面に赤彩痕が認められる。23は脚台を有し外面と口縁部の内面が赤彩されている。22と23はともに最終調整はヘラ磨きとナデであるが、22に比較して23は胴部最大径を測る位置がやや低く器壁も厚い。22は南新保D遺跡A区大溝出土土器に類例がみられる(口縁部を欠く)。これらに先行する金沢市西念・南新保遺跡A区出土土器(1)も完形品ではなく、その意味では貴重な資料といえよう。23の類例としては塚崎遺跡西南部土器溜り第2ブロック出土土器があげられる。24は有段口縁を有する大形の壺で、頸部の外面に突帯を貼付し連続する刻みを施したものである。南新保D遺跡A区大溝出土土器に類例がみられる。25はいわゆるパレス・スタイルの壺の胴部(上位)片で、外面を櫛状

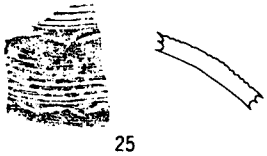


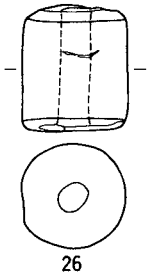


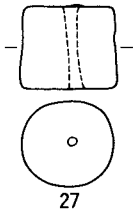












0 10 cm

第8図　大溝出土土器（4）

具によって施文し赤彩し、内面はナデ調整をおこなっている。南新D遺跡A区大溝、C区P—54土坑、D区出土土器を類例としてあげられる。22～25は類例等から考えて、月影式土器としてよいと思われる。

蓋形土器（第9図28～31）

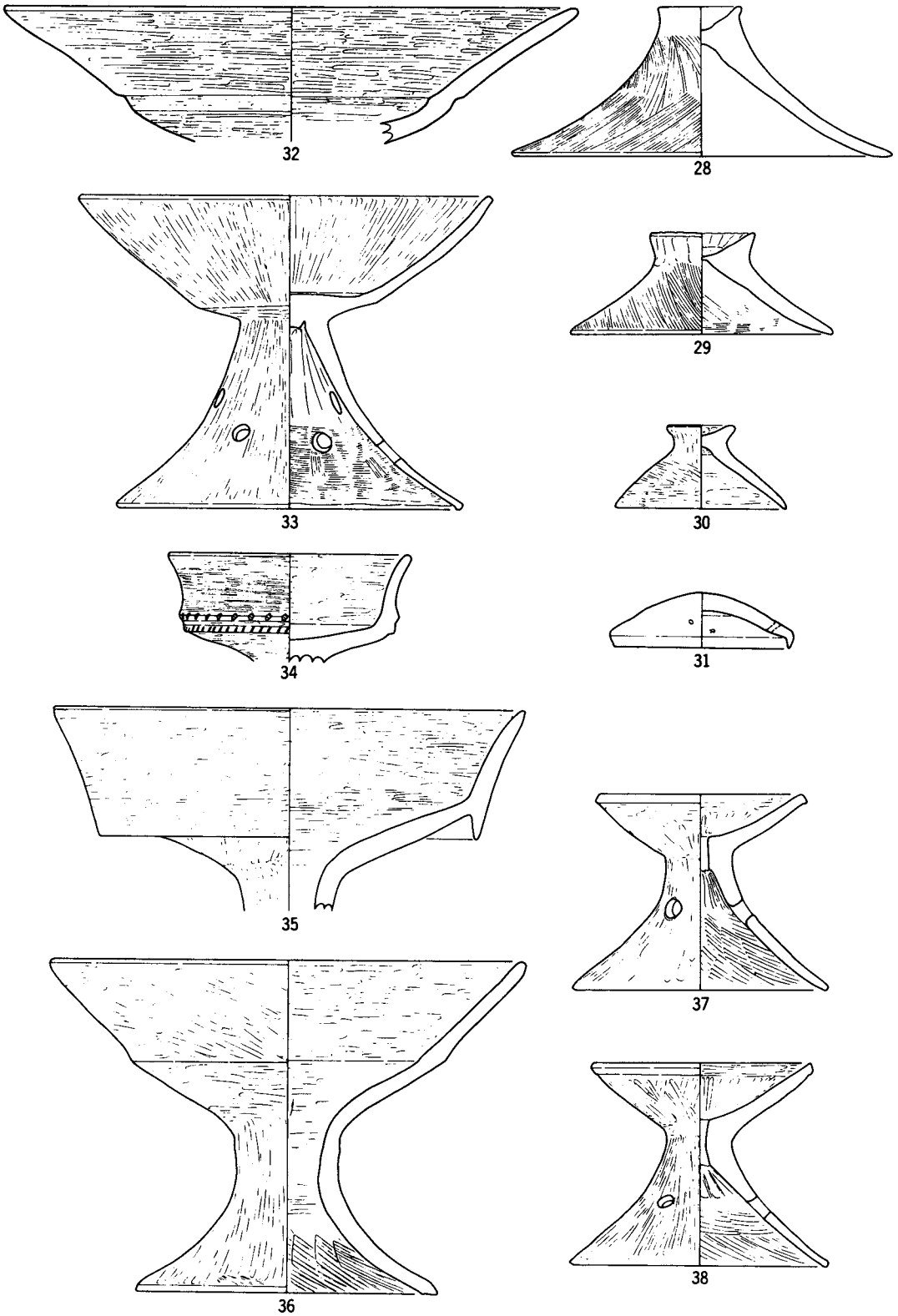
28～31は蓋形土器である。28と29は、体部が外反的に広がりつまみ部上面が凹むもので、外面をハケによって調整し、器面には煤の付着がみられる。また30と31は、器面をヘラ磨きとナデによって調整し、煤の付着が認められないかわりに赤彩痕を観察し得る。この両者の相違はその用途によるものであろう。西念・南新保、南新保D両遺跡出土の蓋を対象とした南勉氏の考察[14]によれば、28と29はB—II型のそれぞれ大型（口径16cm前後）と中型（口径8～13cm）品に分類し得る。このB—II型の蓋は、両遺跡においては月影期のものに多く弥生時代後期にはあまりみられないとされている。体部が内彎的に広がりつまみ部上面が凹む30や、天井部につまみをもたず内彎する体部に孔（2孔1対）を穿つ31は、中型品のなかでも口径の小さい部類に属する。30は西念・南新保遺跡G—4区方形周溝墓（月影期）出土土器に、また31はつくりはやや異なるものの、全体的な印象という点では塚崎遺跡B 16号土坑出土土器に類例を求め得よう。

高坏形土器（第9図32～34）

32～34は高坏形土器である。内彎ぎみの坏底部と大きく外反し外上方へのびる口縁部とが体部の境界部で屈曲し段をもつ32は、坏部が比較的大きくしかも浅いということでは、月影式期にあっては古い時期を中心に出土するものである。新しい時期においては、南新保D遺跡C区P—11—2土坑出土の高坏にみられるように、全体的に小型となり坏部は深くなるといえる。その意味では、32は月影式土器の範疇におさまるものかどうかも含めて、弥生時代後期からの系譜のなかでの検討を要すると思われる。これに対して、比較的小さい坏底部が体部との境界で稜を形成したのち内彎しつつ外上方へのびる33は、南新保D遺跡や南新保三枚田遺跡などに多くみられるもので、それらは月影期にあって新しい時期の所産とされている。ただし全形（特に脚部）をうかがえる資料は少ない。33は黄褐色を呈し器壁が薄く、比較的大きな脚には6個（上2、下4）の透穴を穿っている。また32や33に比較して小型の34は、ほぼ月影期（やや遡る可能性はあるが）に出現するとされるものである[3]。

器台形土器（第9図35～38）

35～38は器台である。このうち35は受部のみで脚部を欠くが、外上方へやや内彎ぎみに開いた体部が、屈曲し段をもったのち外反ぎみの口縁部へ続くものである。屈曲部には長さ1cm程の垂下帯をつくりだしている。口縁部があまりのびないことも特徴の一つであろう。36は受部の体部と口縁部との境界は屈曲するものの段をつくるまでには至らず、内・外面ともに不明瞭な稜線を示すにとどまる。また、径5cmを測る脚部から裾部にかけては、ラッパ状の広がりを有し段をもたない。これに対して37・38は小型の器台である。径3cmを測る脚部に内彎する受部と外反する裾部がつくもので、両者は法量等が酷似し、外面及び受部の内面をヘラ磨き調整し、内面脚部に絞り痕がみられ裾部をハケ調整している点なども類似している。相違点は37に比較して38の受部がやや深いということであろうか。この種の小型器台は、月影期から高畠期にかけてみられ



第9図　大溝出土土器（5）

るが、37と38は布留式併行期の押野西（第II次）L－4土坑出土器台に比較して、受部がやや大きく裾部がそれほど外反せず裾部径も小さいことから、月影式土器としてよいと思われる。同種の小型器台は、大溝から他に数点出土している。

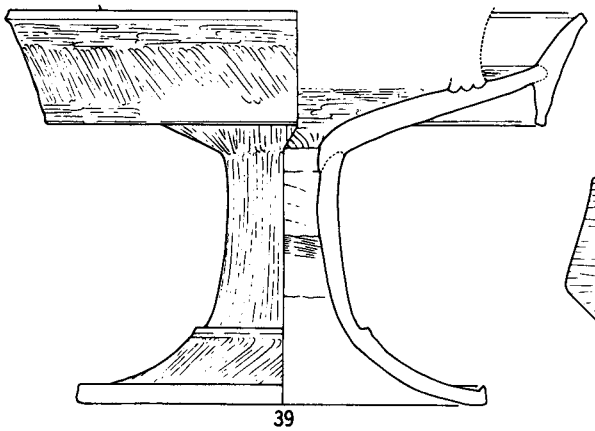
有透装飾器台（第10図39～42）

39～42は有透装飾器台である。または器台結合壺の一種ともいわれている[15]。出土数そのものは少ないが月影期の遺跡ではよくみられる。通常、水平またはやや上向きにのびる体底部に涙滴形の透穴を穿った体部を貼付し、体底部の端部に外反ぎみの垂下帯をとりつけたものが多く、本大溝においても、41や42の他数点が出土している。これに対して39と40はやや特殊なものといえる。39は体部より上を欠き全形をうかがえないが、完形品を含む12個体が出土した南新保D遺跡の有透装飾器台[16]と比較すると、全体的に大型といえる。一例に垂下帯上端の径で比較を試みると、南新保D遺跡の10個体の平均が15 cmであるのに対して、39は22.8 cmを測る。垂下帯の幅も3 cm前後に対して、39は4.7 cmと広く、特に体底部より上位へのとびだしが顕著である。一方、40は装飾性ということではあまり例をみないものである。体部には逆三角形と凸部を上にした三日月形の透穴が交互に6個ずつ計12個配され、口縁部にもワラビ形（と仮称しておく）の透穴が正、逆の順に（一部パターンが乱れ、また不明な個所もあるが）12個穿たれている。垂下帯には4条の沈線がひかれその間に4段のヘラ描きの鋸歯文を刻んでいる。体部がそれほど外傾せず口縁帯の幅も狭いということでは、40は松任市竹松遺跡出土の有透装飾器台[17]を類例とすることができよう。39と40は類例は少ないが、南新保D遺跡に全くみられないことから、月影期にあっても古い時期の所産ではないかと思われる。また41と42も、南新保D遺跡のものに比べ体部がそれほど外傾しないことなどから、それらにやや先行する可能性がある。

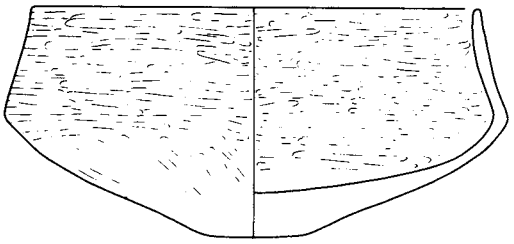
鉢形土器・その他（第10図43～50・第8図26・27）

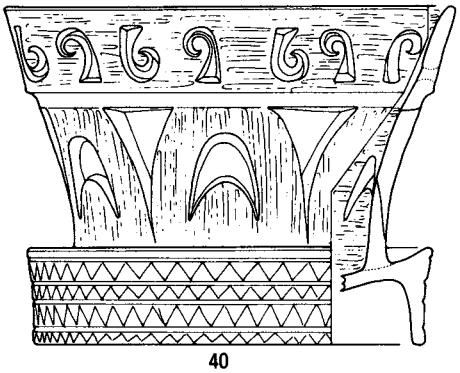
43と44は体部と口縁部との境界が屈曲する鉢で、器高にたいして体部最大径が大きいものである。44の類例として、塚崎遺跡第11号竪穴出土土器があげられる。類例は片側に把手をもつが、44については欠損部分がありどちらともいえない。45は底部穿孔土器である。外面はハケのあとナデ調整、内面は口縁端部をナデ調整し、以下はヘラ削り痕をとどめている。この種の底部穿孔土器は大溝から他に数点出土している。46の鉢は内・外面をハケ調整し、口縁部を先細りにしあげたもので、南新保D遺跡などによくみられる。47は台付の鉢で、内・外面ともに摩耗が著しく調整等は観察し得ない。この種の台付鉢は、西念・南新保遺跡B－1区T－1（弥生時代後期の溝）、南新保D遺跡C区T－1（月影期の溝）出土に類例がみられるように一定の系譜をもつと考えられる。48は手捏ね土器で、外面はナデ、内面もやや強いナデ調整をおこなっている。49は小型の鉢である。50は小型の壺で内・外面をヘラ磨き調整し、外面と内面の口縁部を赤彩したものである。第8図26と27は円筒形の土錘である。同種のものは、塚崎遺跡西南部土器溜り第8ブロック出土品（径3.3 cm、長さ4.4 cm、孔径0.5 cm）が知られている。

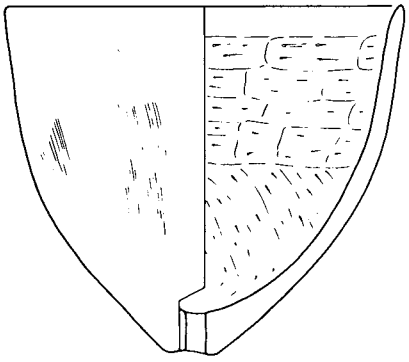
以上、50点について簡単に触れてきたが、今後の整理過程で本溝出土土器の総体的な位置付けをしたいと考えている。

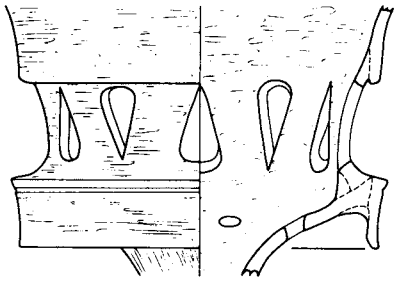

39

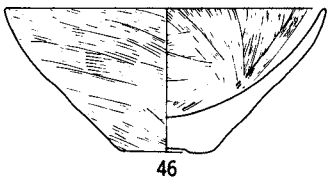
43

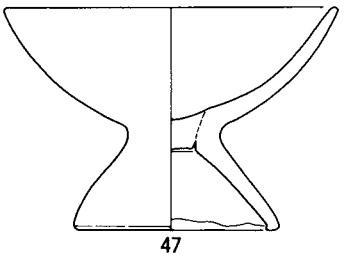

44

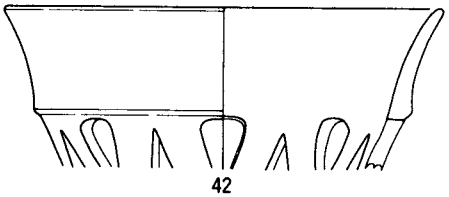

40

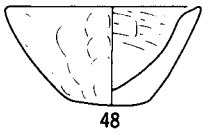

45


41

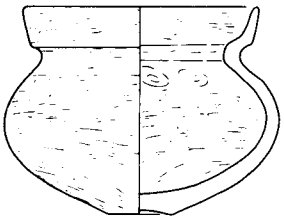

46


47


42


48

49


50

第 10 図　大溝出土土器（6）

0　10 cm

表1　大溝出土土器観察表

番号	器種	出土層	大きさ（単位mm）	色調	胎土	焼成	整形・調整等
1	甕	下層	口径168	淡茶褐色	やや良好	良好	擬凹線8、口縁内・頸部ナデ、外面煤付
2	〃	上層	〃 148	淡褐色	〃	〃	擬凹線7、口縁内・頸部ナデ、外面煤付
3	〃	中層	〃 196	黄褐色	〃	並	擬凹線7、口内・頸ナデ、外面摩耗、外面煤付
4	〃	〃	〃 158	褐～淡褐色	〃	良好	擬凹線7、口縁部内面・頸部外面ナデ、外面煤付着
5	〃	中層～下層	口径306、胴径386、底径56、器高450	暗褐～黄褐色	〃	〃	擬凹線10、口縁内指圧痕とナデ、頸部内外ナデ、肩部外面一部に横方向のナデ
6	〃	下層	口径188、胴径199	褐～茶褐色	〃	〃	擬凹線7（一部不連続）、口縁内・頸外ナデ、頸内はハケのあとナデ、外面煤付
7	〃	中層	口径195、(胴径202)	淡茶褐色	〃	やや良好	擬凹線9、口縁内・頸部ナデ、肩～胴部外はナデ状のハケ、外面煤付着
8	〃	上層	口径232、胴径233	黄褐色	〃	良好	擬凹線9、口縁部指頭圧痕とナデ、頸部内・外面ナデ、外面煤付着
9	〃	中層	〃 138、胴径128	〃	〃	〃	擬凹線7、口縁内・頸部ナデ、外面煤付
10	〃	〃	〃 104、〃 135、底径17、器高149	〃	〃	〃	口縁部内・外面はナデ調整、器面は内・外面ともにいわゆる化粧がけ
11	〃	上層	口径160	淡褐色	良好	〃	口縁・頸部内外面ともにナデ、外面煤付
12	〃	〃	〃 196	〃	やや良好	〃	口縁内指圧痕とナデ、外ナデ、外面煤付
13	〃	〃	〃 252、胴径285	橙褐色	〃	やや良好	口縁内外ナデ、頸部外摩耗、外面煤付着
14	〃	中層	〃 108、〃 142、脚台径72、器高156	淡褐～黄褐色	〃	良好	口縁・頸部内外面と胴部内面はナデ、脚台部内・外面は指圧痕とナデ、器面は外面と口縁内面は化粧がけか
15	〃	〃	口径114、胴径172、脚台径75、器高194	〃	〃	〃	口縁・頸部内外面と胴部最下位内面はナデ、脚台部内・外面は指圧痕とナデ、器面は外面と口縁内面は化粧がけか
16	〃	上層	口径154、胴径211、器高232	淡褐色	〃	〃	口縁・頸部内外面はナデ、口縁端部はおさえている、肩部外面はハケのあとナデ肩部内面は指圧痕、胴部下位は指圧痕と炭化物付着、外面は煤付着
17	〃	下層	口径146、胴径132	淡褐色	〃	〃	口縁部内外面はナデ、胴部内面はナデとハケ、胴部外面は叩き
18	〃	中層	口径139、胴径207、底径35、器高253	暗褐～淡褐～黄褐色	〃	〃	口縁部外面・胴部内面ナデ、頸部外面・口縁部内面ハケのあとナデ、胴部最下位ヘラけずり、外面煤付着
19	〃	上層	口径135、胴径169、底径19、器高174	暗灰褐～橙灰褐色	〃	〃	口縁端部・頸部内面はナデ、胴部下位はナデとハケ、胴部最下位はヘラ状具痕、外面煤付着、底部内面に炭化物付着
20	壺	中層	〃 160	黄褐～淡茶褐色	良好	〃	口縁端部外面ナデ、口縁部内面上位はハケのあとナデ調整

21	壺	中　層	口径140	淡 褐 色	良　　好	良　　好	口縁外波状文、口縁内外・頸部内ナデ
22	〃	下　層	〃 110、胴径 155、底径 31、器高 151	淡茶褐色	〃	〃	胴部中～下位ハケのあとヘラ磨き、器面は化粧がけ、外面一部に赤彩痕
23	〃	〃	口径 99、胴径 158	淡 褐 色	〃	〃	胴部内面は横方向のナデ、脚部内面はヘラ磨きのあとナデ、外面・口縁内面赤彩
24	〃	〃	口径 216	褐～黄褐色	やや良好	〃	口縁外上位ナデ、頸外貼りつけ突帯と刻み、肩外ハケのあとヘラ磨き・赤彩痕
25	〃	〃		暗褐～淡～黄褐色	〃	〃	外面上から櫛描文（4以上）、山形文、くし描文（6）、山形文、内面はナデ
26	土錘	〃	径 42、長さ 50	黄灰褐色	〃	〃	孔径 12 mm
27	〃	〃	〃 38、 〃 33	暗灰褐色	良　　好	〃	孔径 4 ～ 5 mm
28	蓋	中　層	口径 174、器高 70、つまみ部径 38	茶 褐 色	やや良好	やや良好	つまみ部内・外面ナデ、体部内面は摩耗のため観察不能、内・外面煤付着
29	〃	下　層	口径 122、器高 48、つまみ部径 48	黄 褐 色	〃	良　　好	つまみ部内外ナデ、体部内外ともにハケのあと（一部）ナデ、内・外面煤付着
30	〃	〃	口径 79、器高 40、つまみ部径 32	淡 褐 色	良　　好	〃	内面ヘラ磨きのあとナデ、体部は内・外面ともに赤彩
31	〃	〃	口径 82、器高 26	〃	〃	〃	内・外面ナデ、2孔1対（4個）径は 2 ～ 3 mm、外面赤彩、内面にも赤彩痕
32	高坏	下　層	口径 269	茶 褐 色	〃	〃	内・外面ともにヘラ磨き
33	〃	〃	〃 192 脚部径 42、裾部径 162、器高 148	黄 褐 色	〃	〃	脚部内上位・裾部端内ナデ、透穴6個径 12 mm、器面は内・外ともに化粧がけ
34	〃	〃	口径 112	淡茶褐色	〃	〃	外面に突帯と2段の刻み、口端に赤彩痕
35	器台	下　層	口径 221	淡橙褐色	〃	〃	下稜・脚内ナデ、脚内を除く内外面赤彩
36	〃	〃	〃 222、脚部径 50、裾部径 142、器高 148	茶 褐 色	〃	〃	外面一部にハケが残る、脚・裾部内面はハケとナデ調整
37	〃	中　層	口径 95、脚部径 30、裾部径 118、器高 92	灰 褐 色	〃	〃	脚部内面上位はしぼり、透穴は3個径は 9 ～13 mm
38		上　層	口径 100、脚部径 30、裾部径 118、器高 96	暗黄褐色	〃	〃	脚部内面上位はしぼり、透穴は3個径は 9 ～12 mm
39	有透装飾器台	下　層	脚部径 43、垂下帯上位径 226、裾部径 160	黄褐～淡黄褐色	〃	〃	垂下帯両端・裾端部は工具による面取り、垂下帯内面はナデ、脚部内面はハケ（一部）のあとナデ、裾部内面はナデ、裾部外面に沈線状凹み1条、外面の一部に赤彩痕が認められる。
40	〃	中　層	口径 174、垂下帯上位径 156	淡 褐 色～黄褐色～黄橙褐色	〃	〃	垂下帯内面は摩耗が著しく観察不能、垂下帯外面は4条の沈線とその間にヘラ描きの鋸歯文（4段）、体部には逆三角形形と凸部分を上にした三日月形の透穴各々6個（計 12 個）が交互に配置されている、口縁部はワラビ形の透穴が正及び逆立形6組（12 個）配置されると考えられる

41	有透装飾器台	下　層	垂下帯上位径 148	淡茶褐色	良　好	良　好	涙滴形透穴は 5 組（10 個）で最大幅 18 mm、最大長 31 mm、体底部の円形透穴は 4 または 6 個、径は 8 ～10 mm
42	〃	中　層	口径 170	黄橙褐色	〃	〃	器面は摩耗が進んでいるが外面はヘラ磨きか、透穴は 8 組（16 個）最大幅は 18 mm
43	鉢	〃	口径 107、底径 28、器高 41	淡 褐 色	〃	〃	器面は内・外面ともに化粧がけ
44	〃	下　層	口径 174、底径 36、器高 90	〃	〃	〃	外面下位はヘラ磨きのあとナデか、外面に赤彩痕、把手の有無は不明
45	底部穿孔土器	〃	口径 154、底径 19、器高 136	淡茶褐色	〃	〃	外面はハケのあとナデ、口縁部内面はナデ、底部の孔は径 8 mm
46	鉢	中　層	口径 124、底径 36、器高 56	黄灰褐色	〃	〃	底部下面は凹む
47	台付鉢	〃	口径 128、脚部径 36、裾部径 76、器高 87	黄 褐 色	やや良好	〃	器面は摩耗が著しいが脚部内面はナデか外面に煤が付着している
48	手捏ね土器	下　層	口径 75、底径 32、器高 39	黄茶褐色	並	並	外面はナデ、内面はヘラ状具によるナデか、摩耗が著しい
49	小形鉢	中　層	口径 78、底径 16、器高 56	褐～黄褐色	やや良好	やや良好	器面は摩耗が著しいがヘラ磨きか、外面と口縁内面は化粧がけ
50	小形壺	〃	口径 92、胴径 107、底径 25、器高 83	淡灰褐～灰褐色	良　好	良　好	肩部内面に指頭圧痕、口縁部内面と外面（全体）に赤彩痕

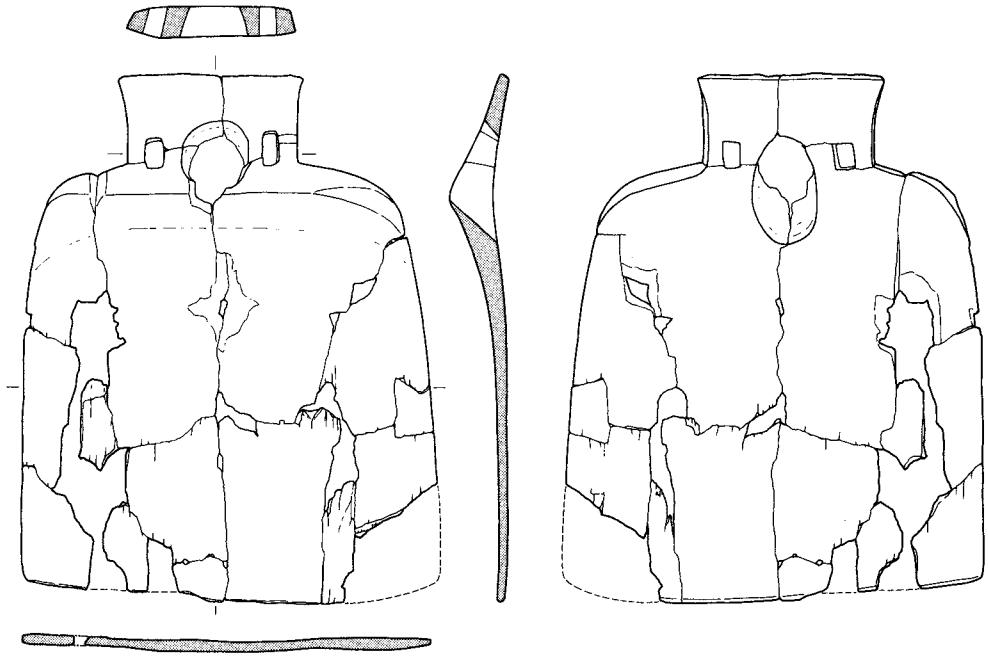
3　大溝出土の木製品

本遺跡出土の木製品は、そのほとんどが大溝出土のものである。未製品が少なく実際に使用されたと考えられる製品が多いが、遺存状態が良くないことから加工痕や使用痕を認められるものは少ない。さて、大溝については、先述したように月影期に比定され、出土木製品の大半は該期のものである。ただ、大溝北端部では平安時代の溝が重複しており、その地点にかかる木製品については時期比定の困難なものもある。本節では、月影期に比定できる木製品を紹介し、平安時代と考えられるものについては次節で紹介する。

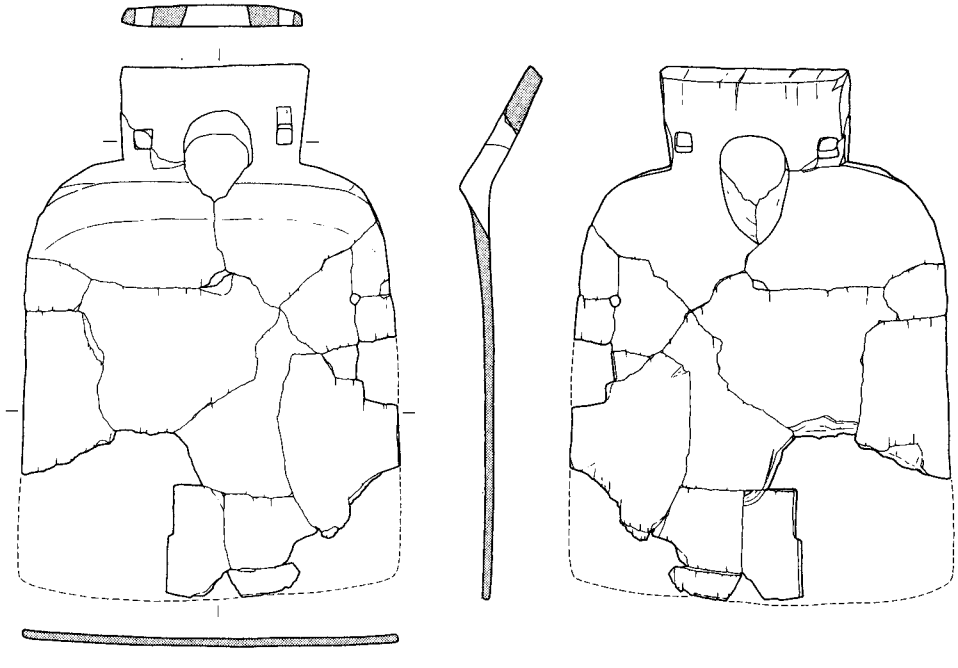
農耕具

鋤（第 11 図 1 ・ 2）

1 ・ 2 は、耕起部が長方形をなし、その上部にやや厚味の長方形を呈する着柄部をつくり出す形状を示すものである。着柄基部には、惰円形を呈する着柄孔が鈍角に穿たれているとともに、その両側には一辺が 1 cm 前後の方形の穴が穿たれている。耕起部表面は、ゆるい彎曲を呈し着柄部との間のゆるい稜を形成する。この種の木製品については、富山県江上A遺跡からも出土しているようであり、着柄部裏面には補強用のあて板が伴うらしい[18]。着柄部にある方形の小穴は、そのあて板を装着させる木クギの穴と考えられる。着柄孔からみて着柄法が鍬と反対にあたることや、耕起部が彎曲していることから鋤の一種と考えられる。1 は、全長 27.2 cm（推定）、耕起部の幅 21.7 cm、同厚さ 0.5 cm、着柄孔の長径 4.5 cm、同短径 3.5 cm、着柄部の長さ 4.6 cm、同幅 9.7 cm、厚さ 1.7 cm を測る。2 は、全長 28 cm、耕起部の幅 19.8 cm、同厚さ 0.4 cm、着



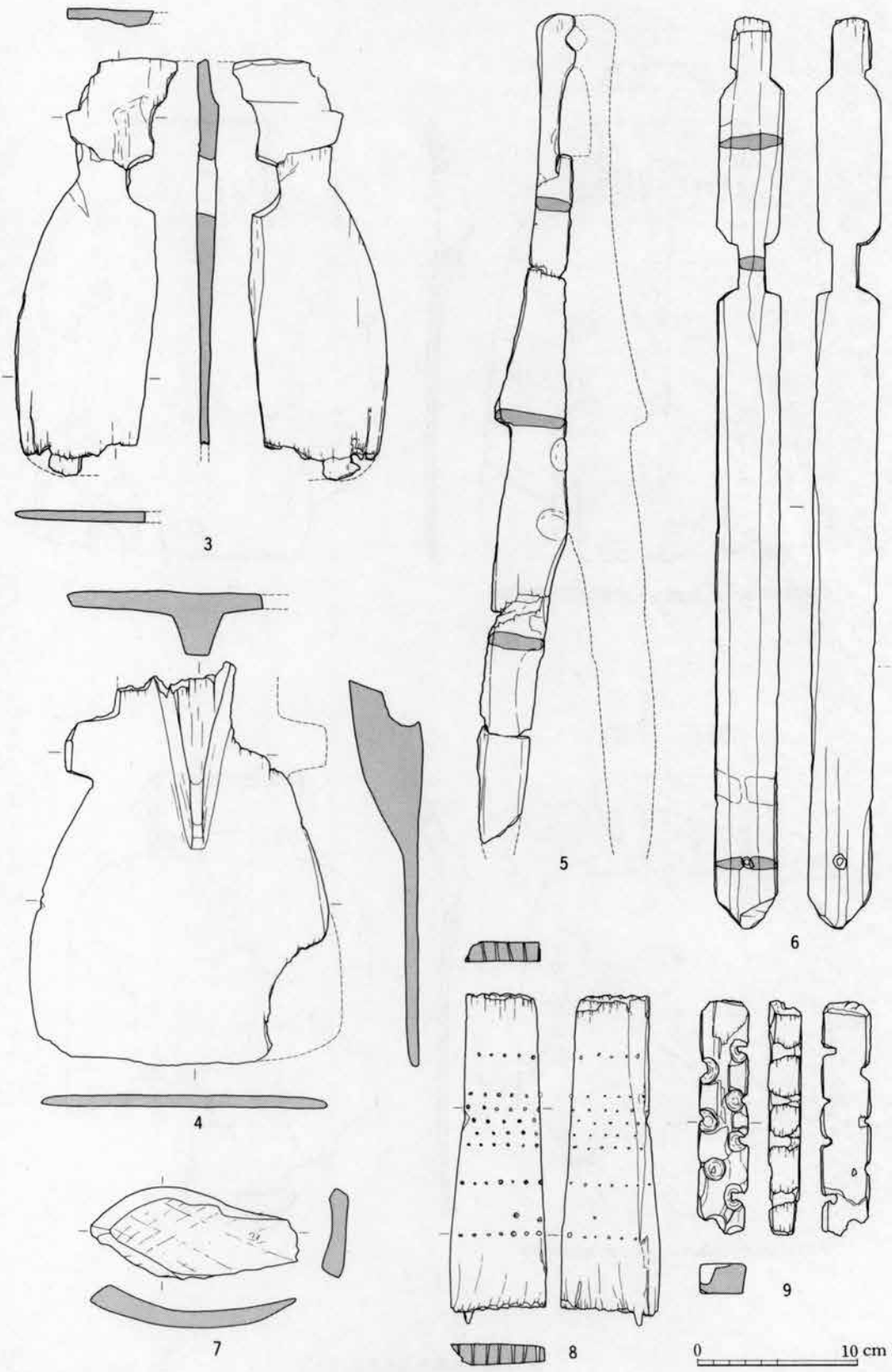
1



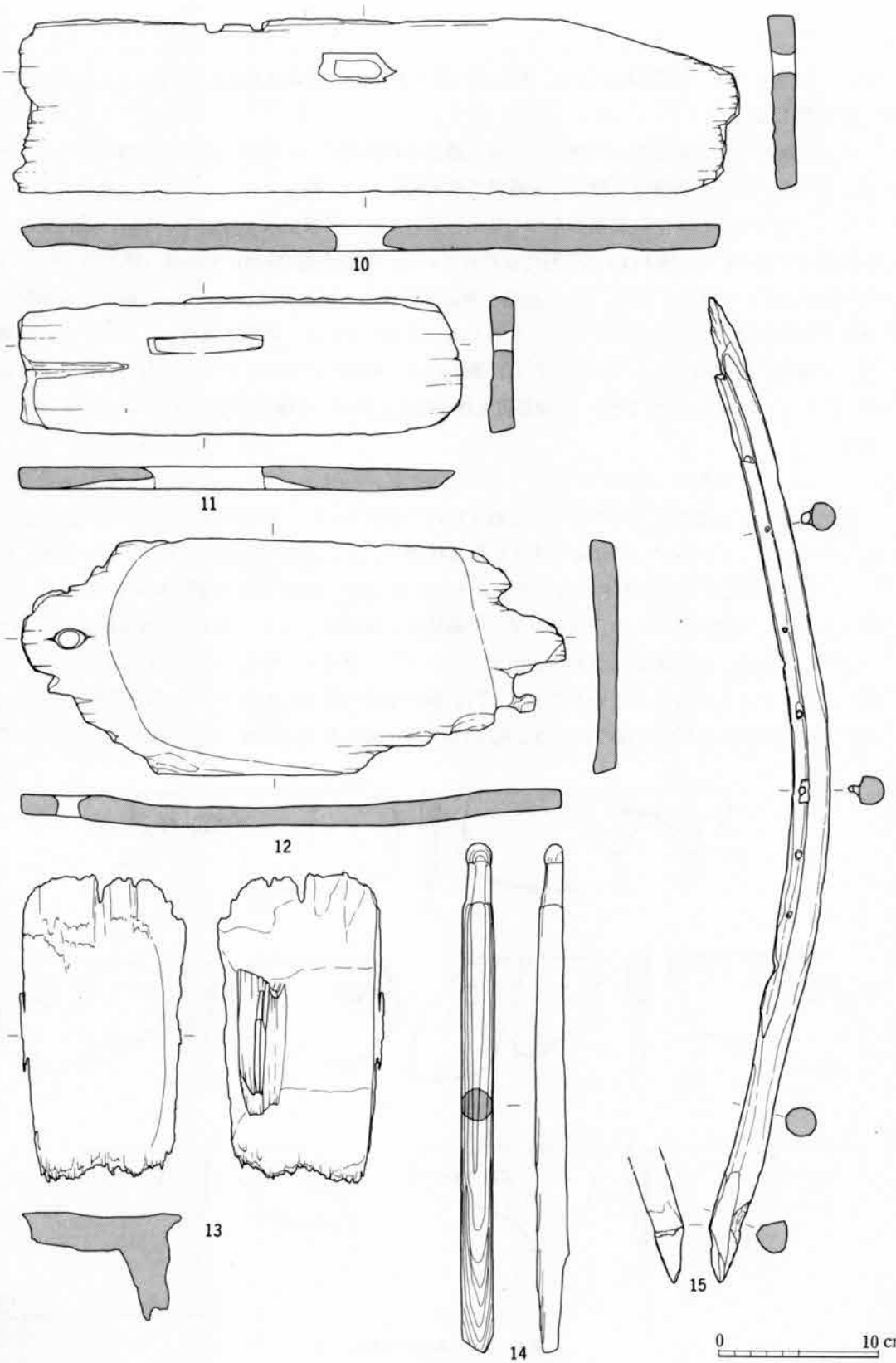
2

第 11 図　大溝出土木製品（1）

0　10 cm



第12図　大溝出土木製品（2）



第13図　大溝出土木製品（3）

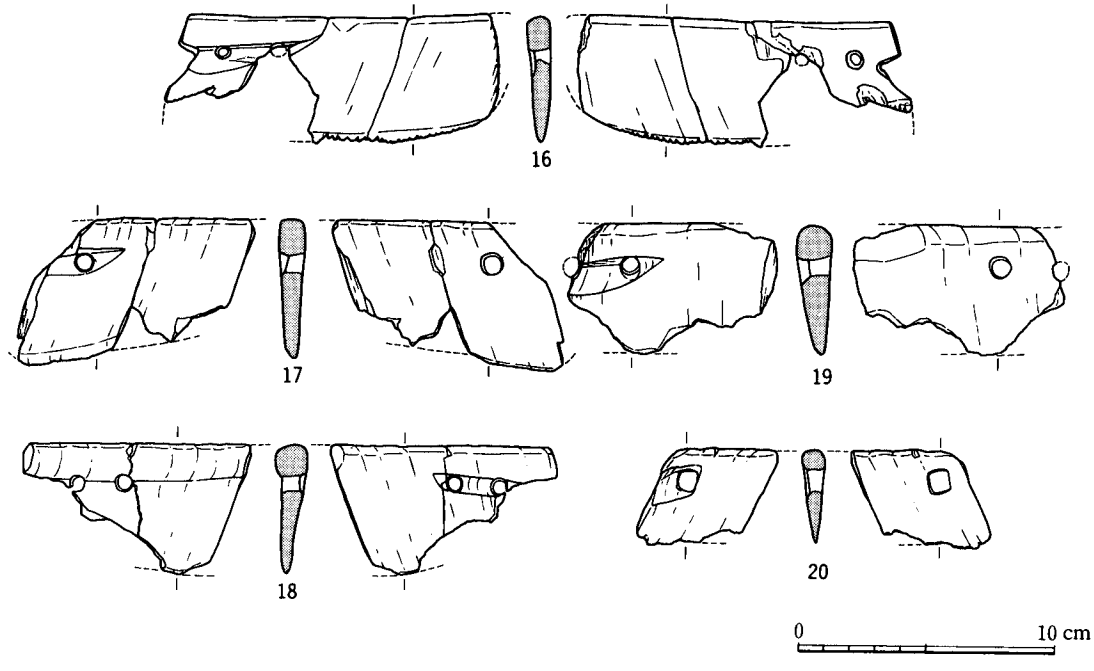
柄孔の長径4.8 cm、同短径3.5 cm、着柄部の長さ4.8 cm、同幅9.8 cm、同厚さ1.1 cmを測る。

鍬（第12図3・4）

3は、鍬身半分と刃縁部が欠損している。頭部を台形状につくり出し、その先端はやや丸味をもっている。耕起部側縁は外彎して刃縁部で最大幅をもつと推定される。全体的にやや薄手のつくりで、裏面にはわずかに突起部をつくり出しているが、明瞭な段をなしていない。着柄孔は、頭縁部より6 cm下に径4 cmの円形に穿たれている。残存全長26 cm、刃縁部の復元推定幅は16 cm前後になると推定される。4は、頭部と耕起部側縁の一部が欠損している。耕起部から頭部に変換する両側縁には凸状に削り出された張り出しを有している。耕起部側縁は、ゆるやかに外彎し、刃縁部で最大幅をもつと推定される。裏面には、断面形が台形を呈する舟形突起がつくり出されている。現存全長25.2 cm、刃縁部復元推定幅19.7 cm、刃縁部の厚さ0.7 cmとやや薄手である。

「ナスビ形」木製品（第12図5）

着柄基部上半は細く下半へゆるやかに幅を拡げて傘状を呈し、耕起部は二股に分岐し、同側縁はゆるく外彎している。いわゆる「ナスビ形着柄鋤[19]」といわれる形状をなしている。しかしながら、着柄基部上半には支木を挿入したと考えられる一辺が1 cm前後の菱形を呈する小穴と、長さ5.7 cm、下幅推定2 cmの三角形を呈する着柄孔が穿たれている。静岡県宮坂遺跡出土の「ナスビ形」木製品に柄が装着したものが出土しており[20]、刃部が二股などにわかれるものは鍬の一種とみなす考えも提起されている[21]。ここでは、鍬か鋤かの断定は避けておく。現存全長52.5 cm、着柄基部26 cm、同基部下端の復元推定幅9 cm、耕起部長さ26.2 cm、刃部中間の幅3.5 cm、厚



第14図　大溝出土木製品（4）

さ 0.8 cm 前後を測る。

えぶり（第 13 図 10・11）

10 は、直線的な頭端部を斜めに削り肩をつくり出す横長の形状を示すものである。頭縁部下 2 cm の中央には短辺 1.8 cm、長辺 4.2 cm の長方形を呈する着柄孔が穿たれている。現存長 46 cm、幅 11 cm、頭縁部の厚さ 1.6 cm、刃縁部の厚さ 1.6 cm を測る。11 は、身部側縁がやや丸味をもつ小振りのものである。頭縁部下 2 cm の中央には短辺 1.1 cm、長辺 7 cm の長方形を呈する着柄孔が穿たれている。現存長 28 cm、幅 8.6 cm、頭縁部の厚さ 1.5 cm、刃縁部の厚さ1.5 cm を測る。

庖丁形木製品（第 14 図 16～20）

本遺跡出土の庖丁形木製品は 5 点を数える。いずれも刃面上辺に溝をもち、2 個の紐穴を穿つタイプのものである。16 を除いては全形を知ることができるものはなく、遺存状況が悪いことから使用痕などは看取できない。16 は、刃面左側上辺に幅を減じながら左側に抜ける溝をつけ、2 個の円形を呈する紐穴を穿っており、刃縁部には鋸歯状の刻みが施されている。現存長 13.1 cm、幅 4.9 cm、刃部中央の厚さ 0.8 cm 前後を測る。17 と 18 は、刃部裏面が表面側にやや彎曲しており、18 は上辺の溝のつくりが右側に抜けると考えられるもので、他のタイプとは逆のつくりを示している。また、頭部が丸くつくり出されているのも特徴的である。19 は刃部中央の厚さが 1.2 cm とやや厚味のつくりである。20 は、紐穴が方形である点で他のタイプと異っている。

漁具

たも（第 13 図 15）

弧の現存長 64 cm を測る。径 2 cm のゆるやかに彎曲する枝部を利用したものである。現存する一方の端部には、削り込んで段差をもたせ、裏面も斜めに削って、かかりをつくり出している。かかりから約 12 cm 程の腹側にU字状に切り込まれた条溝があり、径約 0.5 cm 前後を測る円孔個が約 4 cm 間隔で穿たれている。表面は総じて丁寧なつくりである。

生活用具

火切臼（第 12 図 9）

現存長 14.8 cm、幅 2.7 cm、厚さ 2 cm の角材である。両端が折損している。表面には径 1～1.5 cm 前後の焼けこげた円形のうす孔が両側に4 個づつ交互に配され、計 8 個が認められる。

匙状木製品（第 12 図 7）

身の半分と柄と考えられる部分が欠損している。先がやや厚手で深さ約 1.5 cm 前後に彫り、全体的に丁寧なつくりである。内外面に格子状の浅い傷が認められるが、加工痕かどうかはわからない。

皿状木製品（第 13 図 12）

内面を浅く削りこみ、一辺に耳と考えられる張り出しをもち、円孔が穿たれている。耳は両辺につき一対をなすと考えられ、本来の身の平面形が長方形をなしていたと想われる。ここでは、皿状木製品としたが、大阪府恩智遺跡出土の蓋[22]とする木製品にも類するものである。

案（つくえ）（第 13 図 13）

表面がゆるく彎曲して浅い皿状を呈し、本来の表面形が楕円形をなしていたと想われる。裏面

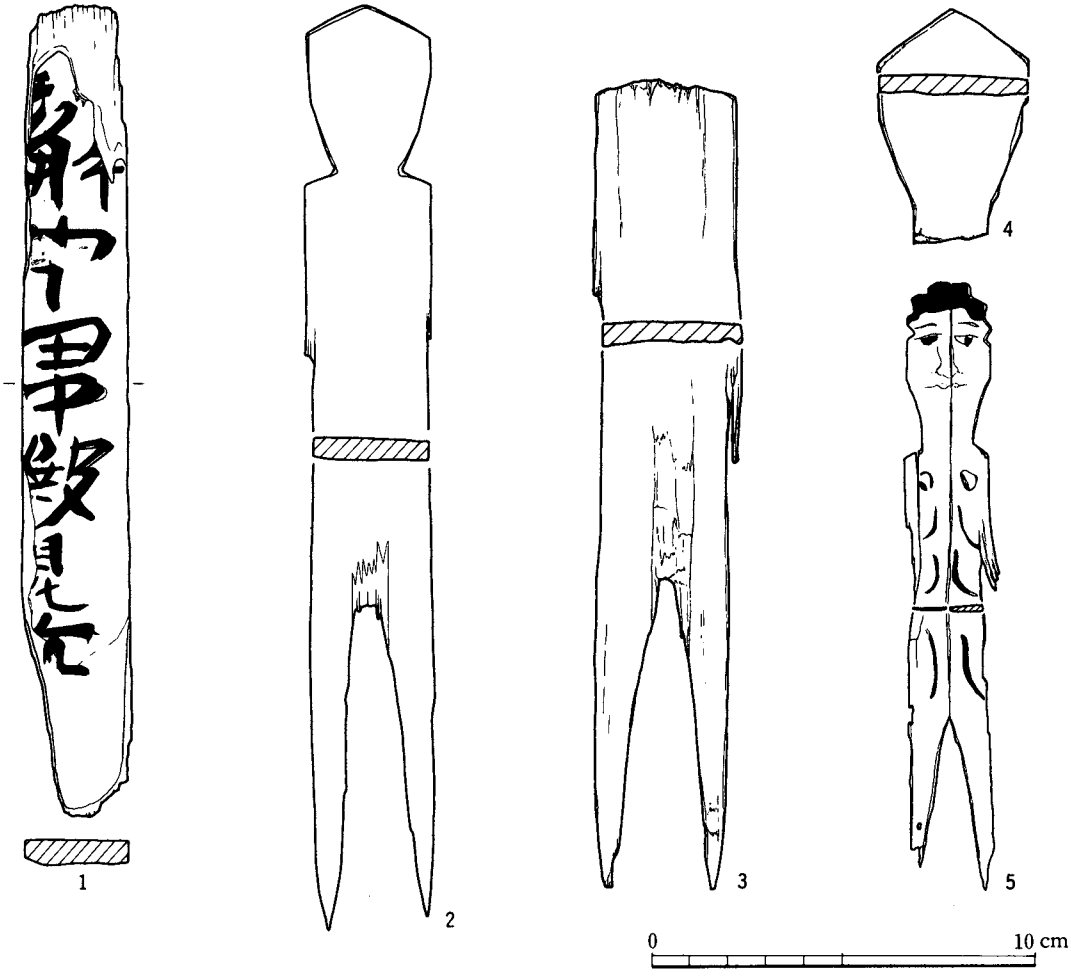
には、高脚部を削り出している。長崎県里田原遺跡[23]に類似品をみることができ、食物を盛る台であると考えられている案と呼ばれるものであろう。

用途不明木製品（第12図6・8、第13図14）

6は、現存長57.3cm、幅4cm、最大厚1cmを測る。端部を山形に削り出し、それより40cmと50cmの二個所で、両側縁に台形状の切り込みをいれるものである。端部には、径0.8cmの不整形な円孔が穿たれている。両面とも丁寧なつくりである。平面形は、布巻具に類似しており、機織具の一種とも考えられる。

8は、厚さ1～1.5cm前後の板状の木片で、両端が欠損し現存長は21cmを測る。表面には、0.1cm前後の小さな孔が横方向に約0.8cm前後の間隔で並列されている。この種の有孔板状木製品は、畿内の数ケ所の遺跡で類例をみることができ、朱などを全面に塗布するが、本例にはその痕跡は認められなかった。

14は、全長32.2cmの完形品である。頂部には2.5cmのかかりが削り出されている。中央部



第15図　木簡と人形

での断面形が径2cmの円形の棒状をなし、いわゆる有頭棒といわれるものである。

4　平安時代の出土品

木簡（第15図1）

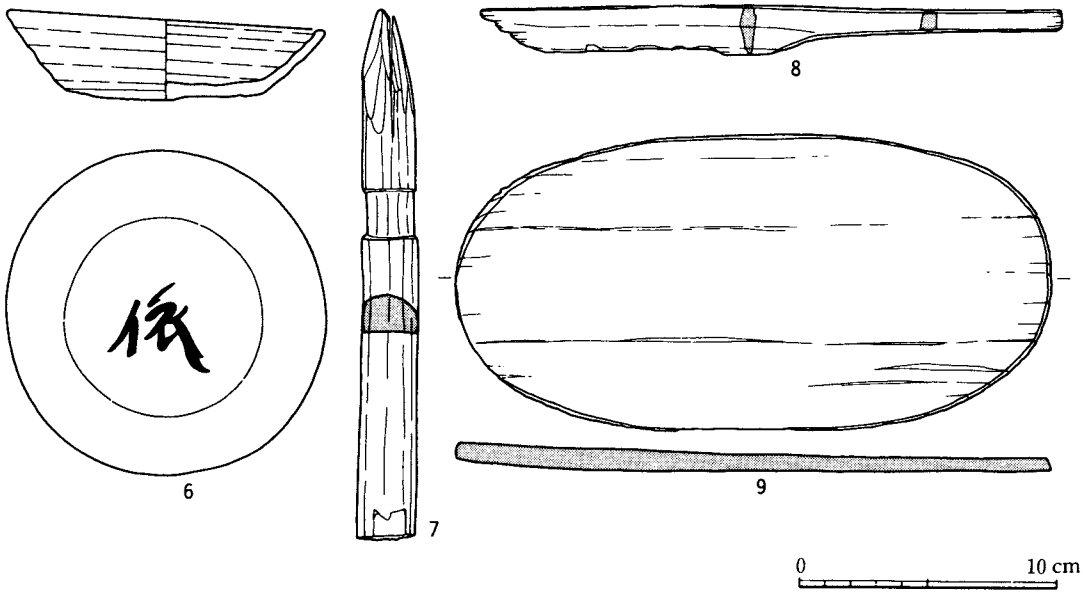
現存長21.3cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。上・下端および左辺が折損し、左辺下部から下端にかけて焼痕が認められる。

釈文　　解申田中殿□□□
〔目代カ〕

解文と考えられる。田中殿の下二文字は、左辺に小さく墨書されており、赤外線テレビカメラによって「目代」と読める可能性があるが、「代」のつくりに難点があり断定はできない。下一文字については、焼けているので判読が困難である。年代については、第16図6の墨書土器が年代を知り得る唯一の共伴資料である。

人形（第15図2～5）

2は、板材の側辺に切り込みを加えて、頭・胴・腕・脚部を削り出しているものである。頭は圭頭をなし、顔の側辺は不整形な六角形状にかたどられている。肩はいわゆる撫で肩である。腕は欠損しているが、胴部中央からやや上方側辺に下方から切り込まれている。股は逆V字形につくり、脚は細長い三角形を呈する。現存長24.2cm、肩幅3.3cm、最大厚0.6cmを測る。3は、2と同様のつくりであるが、頭・腕が折損している。肩部までの現存長21.2cm、肩幅3.7cm、最大厚0.6cmを測り、2よりもやや大振りのものである。4も大振りの頭部であり、3と同タイプと考えられるが、別個体のものである。5は、厚さ0.1～0.2cmの薄板に切り込みをいれてか



第16図　墨書土器とその他の木製品

たどられたほぼ完形品である。頭頂を平担にし髪形をかたどり、顔面には眉・眼・鼻・口を墨描きしている。胴部には、乳房らしきものと「八」の字状の墨描きがなされている。本来、墨書きなどによる写実的な人形はすべて男性であるが、本例は、胴部や髪形の墨描きより女性とみることもできなくはないが、断定はできない。現存長 15.9 cm を測る。

墨書土器（第 16 図 6）

口径 12.5 cm を測る無高台坏である。器面は水挽きによる起伏がみられ、底面にはヘラ起し痕があり「依」と墨書きされている。富来町給分小袋窯期（九世紀末～十世紀前半）併行の所産と考えられる。「依」の墨書土器は、戸水C遺跡から多量に出土している。

刀子形木製品（第 16 図 8）

8 は、刀子の模造品と想われる。背を直線的に削り、先端を削り細めて切先とし、刀身と柄部とにわけている。現存長 27.2 cm を測る。

曲物の底板（第 16 図 9）

9 は、長径 23.3 cm、短径 11.5 cm の惰円形を呈し、周縁をやや斜めに削りおとしており、曲物の底板と考えられる。

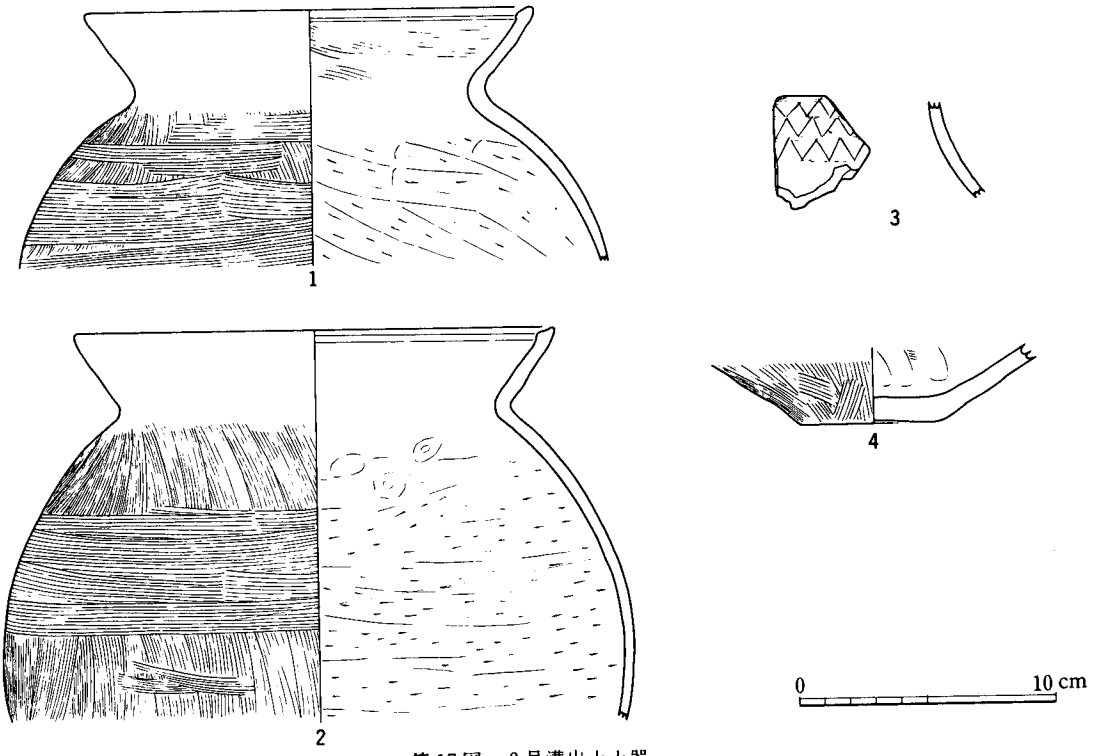
用途不明木製品（第 16 図 7）

現存長 20.8 cm、幅 2.2 cm、厚さ 1.5 cm を測る。裏面は平担で、断面形が蒲鉾形を呈する。上端は舟形状に尖らせ、その下に浅い凹帯がつくられている。表面は丁寧なつくりである。類似品が金沢市二口六丁遺跡からも出土しており、年代的に古墳時代の可能性もある。

5　3 号溝状遺構

大溝より約 10 m 西側にある。近代の方形土坑や溝状遺構に切られ決して遺存状況は良くない。最も遺存状態の良好な個所での法量は、検出面での上端幅約 1.1 m、深さ 20 cm を測る。流路は南北にあり、地形の傾斜に添って北方向にいくにしたがって溝底面が低くなる。断面は緩いU字状を呈し、覆土は黒褐色を呈する。出土遺物は、第17 図の土器の他、板状の木製品も出土している。

以下、第 17 図に掲載した出土土器について若干述べておく。1・2 は、〝く〟の字口縁の甕形土器である。口縁部はナデ調整で、外面肩部から胴部にかけては、縦ハケ調整の後横ハケ調整が施されている。口唇部内側には内傾する肥厚帯をつくり出しているが、2 はやや稜角的である。内面調整は、肩部から胴部にかけてヘラ削りがなされており、2 の肩部には指頭による押圧痕を残している。1 は口径 17.5 cm、2 は口径 18.8 cm を測り、いずれも胴部下半を欠くが、ほぼ球形をなすものであろう。3 は、鋸歯文が三段にわけて浅くヘラ描きされている破片で、外面はヘラ磨きされ、内面はナデ調整である。胎土には砂粒をほとんど含まず、内外面淡灰褐色を呈する。この破片より器種は明確にできないが、いわゆる装飾壺の肩部か器台形土器の脚部が考えられる。4 は、壺形土器の底部であろう。これらは、畿内布留式併行期に比定され、1・2 は高畠式土器の範疇にあり、3 は古府クルビ期に比定できよう。従って、3 号溝の年代は高畠期として良いであろう。



第17図　3号溝出土土器

IV　今後の課題―まとめにかえて―

本年度の調査は、近岡遺跡でも南西端にあたり、月影期を中心とする大溝の検出とその出土品が今回の調査成果の主なものである。月影期の大溝は、金沢市南新保D遺跡などにみられ、当時の集落設営や治水灌漑施設との関連から、その機能や性格が注目されるところである。

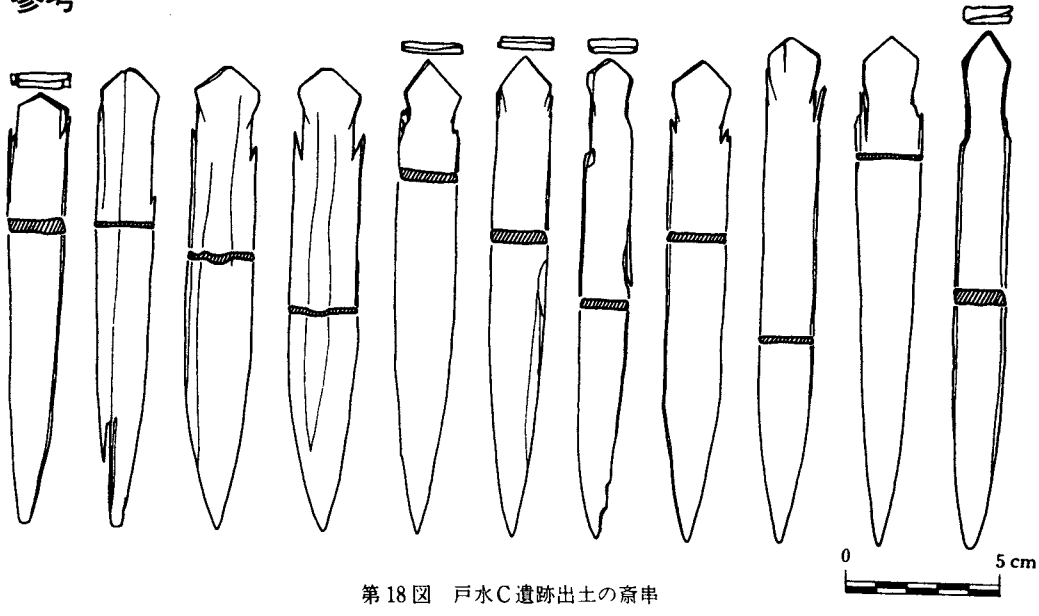
さて、大溝からの出土土器は、吉岡康暢氏の編年[24]でいう「土師器第Ⅰ様式」を代表する広義の「月影式土器」の範疇で捉えられるものが主であり、一部それを前後する時期のものも含んでいる。本概報で掲載した土器は、諸形態の系譜的変化を考慮して代表的なものを抽出したのであり、形式的比率や組成などについては今後の整理作業をまたねばならない。しかし、現状では月影式土器のなかにあっても古相を帯びると考えられる資料が多い印象を受けている。例えば、有段口縁の甕形土器では、土器No.3・4・9の口縁部が外傾し端部が先細りする辰口町高座遺跡などに類例をみる一群に対し、7・8の外反する口縁部の端部が外側にまげられ内面に指頭圧痕を有する南新保D遺跡などに類例をみる一群の方が比率的に少ないようである。供献形態でみると、高坏形土器では、32のように弥生後期からの系譜でおえる古相を帯びたタイプと33のような月影期にあっては新しい時期の所産と考えられるものがあり、器台形土器では、37・38の布留式併行期直前から出現する小型器台が存在するのに対し、有透装飾器台では、大型の39や三日月形の透穴をもつ40があり、涙滴形の透穴をもつタイプに先行する要素をもつものである。こうした型式

的連続性という点だけで新古関係をみてゆくならば、先述のようにそれぞれの形態において新古の二相が存在することが看取できるのである。その他、14・15のS字状口縁を有する甕形土器やタタキを有する17の「く」の字口縁甕形土器などの外来の影響を受けた土器については、小型器台と同様に本溝では新しい時期に伴う印象を受けている。最近、月影式土器については新たな型式設定の傾向にあり[25]、それが明らかにされるにつれて本溝出土土器の位置付けもより鮮明になるであろう。

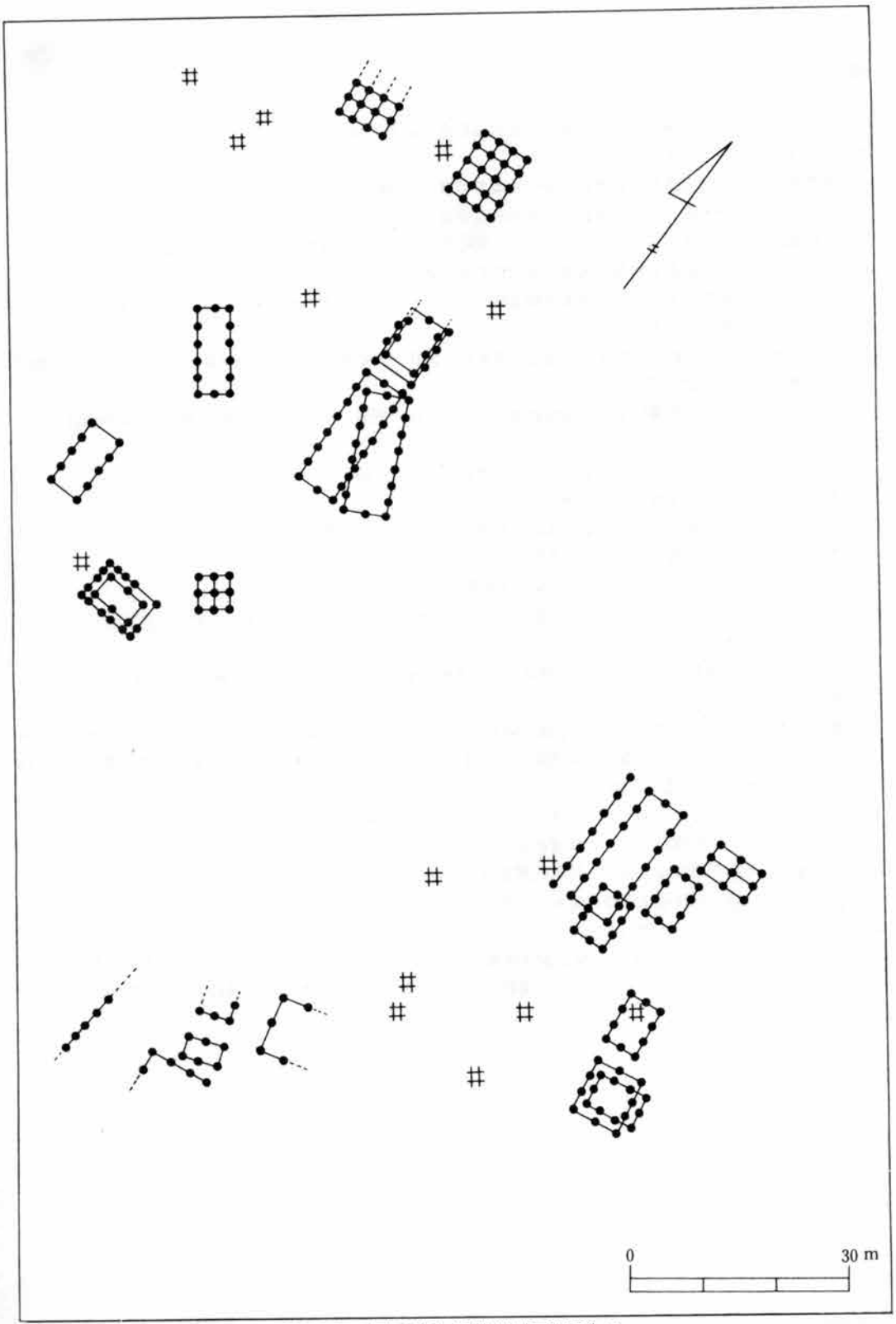
次に、出土木製品については、農耕具の出土が注目された。それらの中には、第11図1・2に示した鋤と考えた木製品や「ナスビ形木製品」など、用途・機能が必ずしも明確でないものも含まれており、今後の資料の増加をまって検討しなければならない。その際、本遺跡周辺がグライ土壌に被うわれた低湿地を控え、大野川の氾濫を受けやすい不安定地であることを考慮した営農形態の一端を明らかにしていかねばならない。

平安時代の遺物においては、墨書土器、人形、木簡の出土があった。墨書土器は「依」と読めるもので、隣接する戸水C遺跡から多量に出土したものである。このことは、これら平安期の遺物・遺構が戸水C遺跡と極めて強い関連のあることを示している。人形4点は、戸水C遺跡から出土した斎串と同様に律令的祭祀が行なわれていたことを示すものであり、木簡が「解申田中殿目代□」と読める可能性があることからも、それらは戸水C遺跡の性格付けに少なからず寄与する資料となるであろう。戸水C遺跡については、庄所説、加賀郡の郡家説、郡津説などの諸説[26]が提起されているが、同遺跡の総合的な検討がなされておらず、いずれの説が有力であるともいえないのが現状である。今後、文献史学からの協力も得て、木簡の意味するところや戸水C遺跡との歴史的関連について検討していかねばならないであろう。

参考



第18図　戸水C遺跡出土の斎串



第 19 図　戸水Ｃ遺跡主要建物跡配置概念図

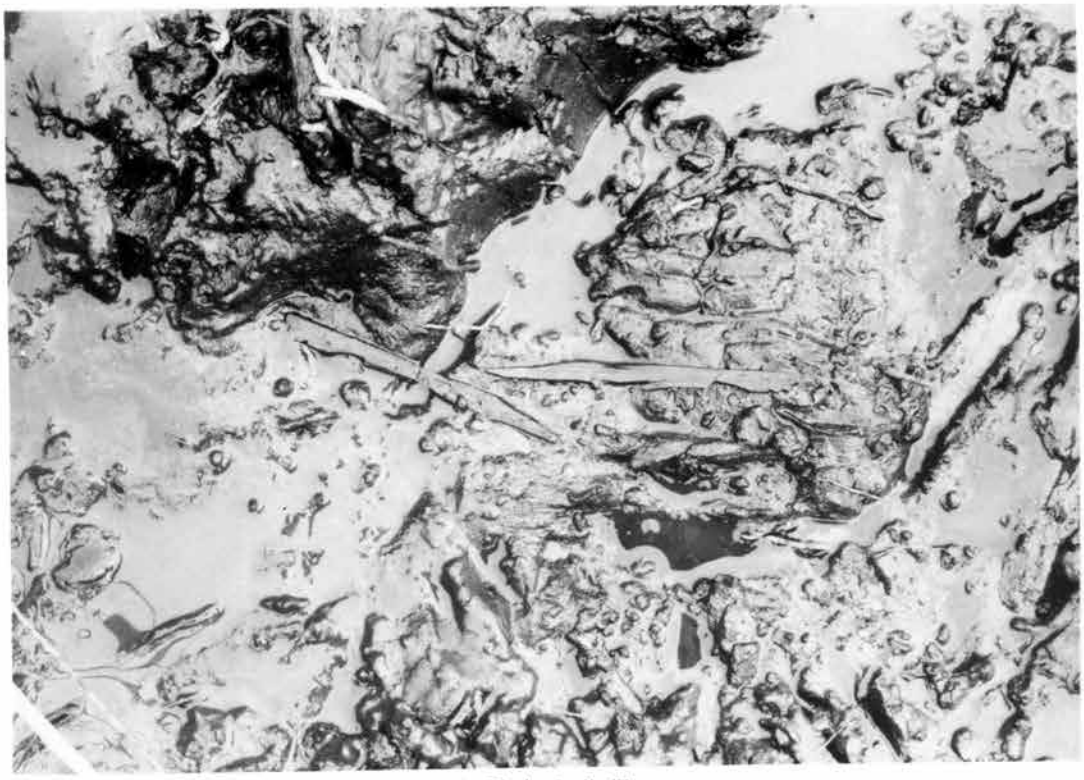
註

(1) 宮本哲郎他『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会　1983年
(2) 出越茂和氏の教示による。
(3) 宮本哲郎他『金沢市南新保D遺跡』金沢市教育委員会　1981年
(4) 南　久和他『金沢市二口六丁遺跡』金沢市教育委員会　1983年
(5) 四柳嘉章『金沢市藤江B遺跡—金沢バイパス関係埋蔵文化財調査概報—』石川県教育委員会　1970年
(6) 出越茂和『金沢市畝田・無量寺遺跡』金沢市教育委員会　1983年
(7) 藤則雄・四柳嘉章「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」(『考古学研究』17—3』) 1971年
(8) 宮本哲郎氏の教示による。
(9) 吉岡康暢他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II　塚崎遺跡』石川県教育委員会　石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　1976年
(10) 南　勉「金沢市押野西遺跡第II次発掘調査のL—4土坑の概要」(『金沢市二口町遺跡』) 金沢市教育委員会 1983年
(11) 橋本澄夫・南　久和『金沢市高畠遺跡』金沢市教育委員会　1975年
(12) 中西常雄『北大津の変貌』　1979年
(13) 谷内尾晋司、福島正実、浜野伸雄各氏他、県埋蔵文化財センター職員の教示による。
(14) 南勉氏は註(1)第6章第6節において考察している。
(15) 佐原真「弥生土器」(『日本の美術』125) 1976年
(16) 註(3)第5章において宮本哲郎・栃木英道によって「装飾性を帯びた器台形土器（いわゆる装飾器台）について」と題した考察をおこなっている。
(17) 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」(杉原荘介、大塚初重編『土師式土器集成　本編I』) 1971年
(18) 楠正勝氏の教示による。
(19) 黒崎直「古墳時代の農耕具（ナスビ型着柄鋤を中心として）」(『研究論集III』奈良国立文化財研究所) 1976年
(20) 鈴木隆夫、池田将男「宮坂遺跡、潮城跡」(『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊』) 静岡県教育委員会他 1981年
(21) 町田章「木器の製作と役割」(『日本考古学を学ぶ（2）』) 1979年
(22) 毛利光用子他『恩智遺跡I』瓜生堂遺跡調査会　1980年
(23) 正林護他『里田原遺跡略報II』長崎県教育委員会　1974年
(24) 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」(『考古学ジャーナル』6) 1967年
(25) 谷内尾晋司などによって進められている。
(26) 河村好光氏は『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報（5）』のなかで、庄所ないし加賀郡の郡家という想定も可能だとし、吉岡康暢氏は『東大寺領横江庄遺跡』のなかで加賀郡津など郡衙級の遺跡であると推定している。

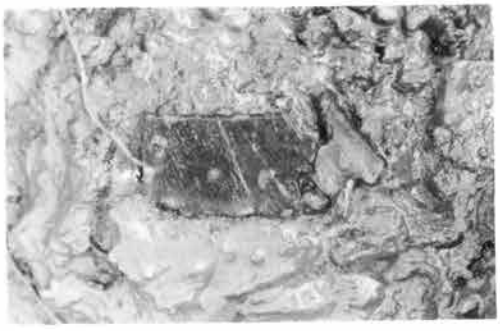
近岡遺跡周辺航空写真

調査区全景（南から）

大　溝（東から）



人形出土状況



庖丁形木製品出土状況

火切臼出土状況

鋤出土状況

人　形

出土木簡

金沢市近岡遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書
（7）

印刷・発行　1984年3月
編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
印刷所　㈱橋本確文堂